



2025 年度  
きょう育の和センター報告書  
No. 7



和歌山信愛大学



## 目 次

I. はじめに	1
II. 2025 年度きょう育の和センターの活動報告	2
【こどもフェスタ】	
1. 和歌山信愛大学こどもフェスタ in 新宮	6
2. 和歌山信愛大学こどもフェスタ IN みなべ	10
3. 和歌山信愛大学こどもフェスタ in 本町	13
4. 和歌山信愛大学こどもフェスタ in ありだ	20
【研究・ひろば・イベント等の協力】	
1. 高野山で体験しよう	26
2. わくわくキャンプ	28
3. 森下ゼミの地域交流の報告	30
4. 算数おもちゃ箱	33
5. 学外での音楽サークルおよびダンスの出演	35
6. 第 42 回 生協まつり	37
7. バレーボールサークル活動報告書	38
【北山村と和歌山信愛大学との包括連携協定締結】	43
1. 北山村・和歌山信愛大学包括連携協定記念交流会 報告	45
【有田川町教育委員会と和歌山信愛大学との包括連携協定締結】	50
【新宮市と和歌山信愛大学との包括連携協定締結】	52
【自主活動】	
1. 「チューリップ 150 球」を咲かせようプロジェクト	54
2. 「ひまわり」を咲かせようプロジェクト	55
【子育て支援への支援活動（すくのび応援隊）】	57
【学生地域ボランティアサークル活動支援】	61
【保育士・保育の現場の魅力発信事業】	68
III. 正課授業の取り組み	
1. 1 年生必修科目「ボランティア実習」	73
2. 1 年生選択科目「地域連携フィールド学習」	75
3. 2 年生必修科目「地域力再生論」	79
4. 2 年生必修科目「地域連携フィールドゼミナール」	80
宮定ゼミ	81
千森ゼミ	85
小田ゼミ	89
飯田ゼミ	93
IV. おわりに	97

## 1. はじめに

和歌山信愛大学「きょう育の和センター」は、大学と地域社会の様々な連携の窓口として7年目になりました。地域と大学が連携を深め、これからの和歌山の未来をつくる学生が地域の魅力を肌で感じ取り、地域に笑顔が広がるように今年度も取り組んできました。

きょう育の和センターは、「教育」「共育」「郷育」の三つの「きょう育」を実現し、「和（なごみ）の街 和歌山」を目指しています。「教育」は、子育て・子育てに関わる機関・団体・学生に学びの機会を提供すること、「共育」は、地域が共に子育てに関わる社会を育み、「郷育」は、世代循環により、故郷を大切に想う心を育てることを目指します。

2025年度も、学生のチャレンジしたいことに寄り添いながら、多くの活動を展開することができました。こどもフェスタ IN 有田、こどもフェスタ IN みなべなど、地域の自治体との連携・協力のもと開催された子育て支援活動も大成功に終わりました。

6月には、日本でただひとつの和歌山県内の市町村と接していない「飛び地」の村である北山村と和歌山信愛大学との包括連携協定を締結することができました。連携協定記念交流事業として、2泊3日で、学生24名が北山村を訪問し、地域の魅力を肌で感じ交流を深めることができました。2026年2月には、新宮市と有田川町教育委員会とも包括連携を締結することができました。和歌山県内の自治体に、信愛大学は温かく見守られながら、育てていただいていることに、心から感謝いたします。

本報告書には、きょう育の和センターの活動、学生のボランティアやサークル活動、授業科目「地域連携フィールドゼミナール」や「ボランティア実習」「地域力再生論」「地域連携フィールドゼミナール」などにおける地域交流やフィールドワークの報告を掲載しております。

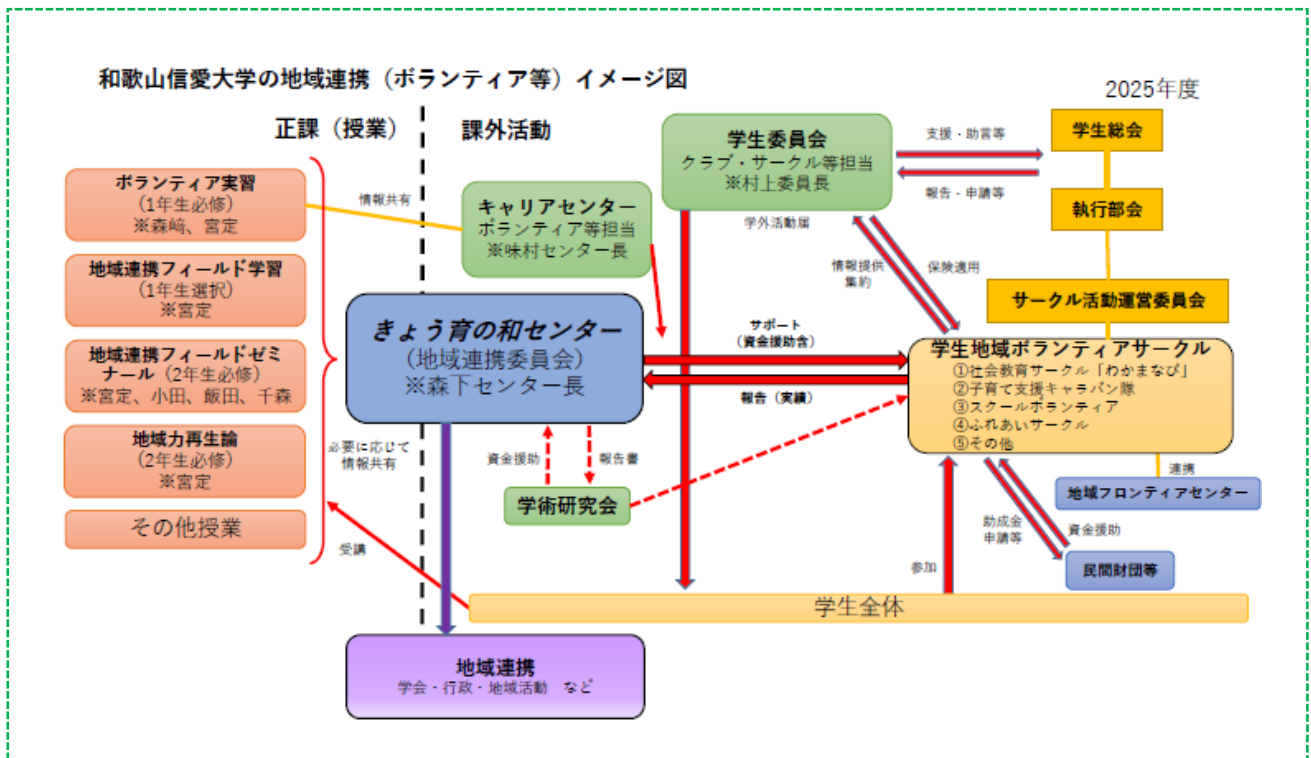
学生は、地域に出向き地域の方々との交流を深めるのはもちろん、地域の魅力を再発見し、和歌山の魅力を確実に感じ取っています。これからも、地域の方々の温かさを感じ、自然豊かな和歌山の魅力をさらに感じ取ってほしいと思います。そして、保育者・教育者・社会人となった際、子どもたちや出会った人に和歌山の魅力について発信してほしいと思います。

今後も、三つの「きょう（教・共・郷）育」の実現を目指して、地域の方々のご協力とご支援をいただきながら、取り組んでまいりたいと考えています。この活動報告書は、おかげさまで第7号となります。今年度の成果報告を活かして、さらに発展できるよう努力してまいります。今後とも、忌憚なくご助言・ご指導を頂ければ幸いです。

和歌山信愛大学きょう育の和センター  
センター長 森下 順子

## II. 2025年度きょう育の和センター活動報告

和歌山信愛大学は開学7年目となりました。きょう育の和センターは、今年度も学生と共に地域へ足を運び、多くの方々との出会いや交流を重ねることができました。活動を通して、地域の温かさに触れながら、地域とのつながりを一層深めることができた一年でした。



## 2025年度の主な活動：テーマ

### 【こどもフェスタ】

	活動テーマ	月 日	場 所
1	和歌山信愛大学こどもフェスタ in 新宮	2025年3月4日(火)	和歌山県立なぎ看護学校
2	和歌山信愛大学こどもフェスタ IN みなべ	2025年5月18日(日)	小目津公園
3	和歌山信愛大学子どもフェスタ in 本町	2025年7月12日(土)	和歌山信愛大学
4	和歌山信愛大学こどもフェスタ in ありだ	2025年10月26日(日)	有田市文化福祉センター

### 【研究・ひろば・イベント等の協力】

	活動テーマ	月 日	場 所
1	高野山で体験しよう	2024年11月24日(日)	高野山
2	わくわくキャンプ	2025年3月1日(土) ～3月2日(日)	紀北青少年の家
3	森下ゼミの地域交流	2025年7月2日(水)	熊取町文化ホール
		2025年11月17日(月)	山崎小学校体育館
4	さんすうおもちゃ箱	2025年8月23日(土)	和歌山信愛大学
		2025年10月11日(土)	
5	音楽サークル・有志ダンスサークル	2025年10月4日(土)	和歌山市みその商店街
		2025年10月19日(日)	有功ヶ丘学園
6	生協祭り	2025年10月5日(日)	和歌山城砂の丸・西の丸広場
7	バレーボールサークル		

### 【有田市との連携協定に関する連携・協力：幼児教育に関すること】

令和7年度有田市保育士研修会における講師の派遣

目的：保育士の資質向上のための研修

対象：有田市立保育所・こども園に勤務する保育士および保育教諭

場所：有田市立保田保育所 2階多目的ホール

	講 師	研修タイトル	日 時
1	助教 前島 美保	保育環境を考える ～ こどもの育て井を支える環境作り ～	2026年1月24日(土) 13:00～14:30
2	教授 森崎 陽子	子どもの体と心の成長のために 巧みな動きを育てよう！	2026年2月14日(土) 13:00～14:30

### 【北山村と和歌山信愛大学との包括連携協定締結】

日時：2025年6月13日(金)

	活動テーマ	月 日	場 所
1	北山村和歌山信愛大学包括連携協定記念交流会	2025年9月2日(火)～ 9月4日(木)	北山村

**【有田川町教育委員会と和歌山信愛大学との包括連携協定締結】**

日時：2026年2月3日(火)

**【新宮市と和歌山信愛大学との包括連携協定締結】**

日時：2026年2月5日(木)

**【有田市との連携協定に関する連携・協力：人材育成に関すること】**

科目「保育・教職実践演習（幼）」における現場調査として、有田町の公立保育所2園で、運動会に参加し学ばせていただきました。

●有田市立そとはま保育所（2名参加）

日時：2025年10月10日（金） 運動会準備に参加

2025年10月11日（土） 運動会に参加

●有田市立保田保育所（3名参加）

日時：2025年10月10日（金） 運動会準備に参加

2025年10月11日（土） 運動会に参加

**【自主活動】**

	活動テーマ	月日	場 所
1	「チューリップ100球」を咲かせようプロジェクト	2023年11月～	和歌山信愛大学 3号館前花壇
2	「ひまわり」を咲かせようプロジェクト	2024年5月～	和歌山信愛大学 3号館前花壇

**【子育て支援への支援活動（すくのび応援隊）】**

子育てネットワークすくのび（地域子育て支援拠点で子育て支援を担うスタッフ）に対する支援者への支援活動。

	活動テーマ	日 時	場 所	参加者
1	すくのび応援隊 交流会 第4回	2025年5月16日(金) 10:00～12:00	和歌山信愛大学 保育実習室	子育て支援ネットワークすくの びメンバー12名・きょう育の和セ ンター委員2名
2	すくのび応援隊 交流会 第5回	2025年9月26日(金) 10:00～12:00	和歌山信愛大学 保育実習室	子育て支援ネットワークすくの びメンバー9名・きょう育の和セ ンター委員1名
3	すくのび応援隊 研修会	2025年8月29日(金) 10:30～12:00	和歌山信愛大学 音楽室	講師：越野章史 氏 子育て支援ネットワークすくの びメンバー・学生・本学教員・そ の他 計41名
4	すくのび応援隊 交流会 第6回	2026年2月17日(火) 10:00～12:00 予定	和歌山信愛大学 保育実習室	

### 【学生地域ボランティアサークル活動支援】

子育て支援キャラバン隊・わかまなびの学生主体の活動に対する助言・指導、及び活動のバックアップ

#### 〈和歌山信愛大学子育て支援キャラバン隊〉

	活動テーマ	日時	場所
1	子ども食堂よみきかせ	2025年8月9日(土)	和歌山市中央コミュニティセンター ぼけっと子ども食堂
2	和信祭よみきかせ	2025年11月29日(土) ～30日(日)	和歌山信愛大学 保育実習室

	活動テーマ	日時	場所
1	「わかまなびを知ろう」地域の方、OB、OG、在学生の交流会	2025年3月15日(土) ～16日(日)	天野地域交流センター 簡易宿泊所「ゆずり葉」
2	天野育成会 クリスマス会	2025年12月21日(日)	天野地域交流センター 簡易宿泊所「ゆずり葉」

### 【保育士・保育の現場の魅力発信事業】

和歌山県こども未来課から社会福祉法人和歌山県社会福祉協議会への委託により実施された、「保育の現場を紹介する動画の作成」における活動のバックアップ

## 【こどもフェスタ】

### 1. こどもフェスタ in 新宮

#### (1)概要

日時：2025年3月4日（火）

場所：和歌山県立なぎ看護学校

共催：きのくに活性化センター

参加人数：大人5名、こども4名 計9名

スタッフ：和歌山信愛大学学生：6名

和歌山県立なぎ看護学校学生：23名

教職員：3名



図1 チラシ

#### (2)学生レポート

##### ①学生メンバー

卒業生（応募時：4年生）2名

4年生（応募時：3年生）1名

3年生（応募時：2年生）1名

2年生（応募時：1年生）2名

##### ②活動内容と担当した学生の感想

###### 【交流会】

交流会では、最初に1人1分以内で自己紹介を行った。1分という短い時間で自分自身を表現することに戸惑う学生もいたが、趣味で共通点を見いだしたり、特技や将来の夢に対して尊敬の念を抱いたりすることで、和歌山市と新宮市という地形上の距離があるにもかかわらず、心の距離は一気に縮まった。

また、自己紹介とは別に、自己紹介ゲームと超難問ビンゴゲームの2つを実施した。子どもフェスタのブース担当ごとに班に分かれて取り組み、和歌山県立なぎ看護学校の学生と和歌山信愛大学の学生が互いに協力しながらゲームに参加する姿が見られた。

###### （1日目）

◎本館先生の講話：「紀南地域の子育ての現状とこれから～看護師と保育士に期待すること」など

かづこ助産院の助産師である本館千子先生をお招きし、和歌山県立なぎ看護学校と和歌山信愛大学が合同で講話を拝聴した。包括的性教育とモラル、子育てがしにくいと感じる要因や現状などについての話を伺うことができ、将来看護師として、また保育者として子育て家庭を支える上で非常に有意義な時間となった。

###### 〈学生の感想〉

私が住んでいる地域では、人口が5000人を下回っています。周囲を見渡せば高齢者が多く居て、子どもの声は小学校やこども園以外の場所で中々聞くことができません。そこで、町役場では少子高

齢化が進む中で、様々な子育て施策が提案されていました。しかしながら、5000人を下回るという事態になり、「私自身これ以上どうすれば人口が増加するのだろうか」と内心諦めていました。その中で、今回本館先生より話を伺うことができ、出生数が減少している理由の1つに“収入ランキングの低さ”や30年以内に南海トラフ巨大地震が発生しやすいと言われる“海が近いという地域柄”が挙げられると知りました。そして、私の住んでいる地域と収入ランキングの低さ及び地域柄を照らし合わせた所、合致する点が多くあり、子育てがしにくい原因には周囲の環境が関わっていると感じました。以上から、私は将来保育者として少しでも子どもたちやその保護者が生活しやすい・子育てしやすいと感じられるよう、実際に子育てに関するストレスや悩みを聞いたり、悩みの部分で改善できる部分があれば、周囲の環境を通して援助したりしたいと考えました。

(2日目)

#### 【保育プログラム】

##### ●手遊び『バスに乗って』

今回の手遊びでは、子どもたちにとって身近で人気のある「乗り物」をテーマにした『バスに乗って』を取り入れた。動きに合わせて体を動かしたり、声を出したりする中で、保護者の方と一緒に笑顔で楽しむ様子が多く見られた。年齢の違いに関わらず参加しやすい内容だったため、乳児から幼児まで幅広い年齢の子どもたちが関わることができた点が良かったと感じる。

##### ●読み聞かせ『サンドイッチ サンドイッチ』

色鮮やかなイラストとリズムカルな言葉が印象的な絵本を用いたことで、特に乳児の子どもたちが絵本の世界に引き込まれる様子が見られた。「パンをのせて、レタスをのせて…」という繰り返しの言葉がわかりやすく、子どもたちも一緒に口ずさむ姿が印象的だった。読む側としても、子どもの反応を見ながらテンポを工夫することで、より引き込まれる読み聞かせができたと感じる。

##### ●読み聞かせ『きんぎょが にげた』

大型絵本を使用したことで、集団の中でも絵が見やすく、子どもたちの注目を集めることができた。「きんぎょがどこにいるかな？」と子どもたちに問いかけながら進めることで、ただ聞くだけでなく、参加型の読み聞かせになった。子どもたちが指をさしたり、声に出して答えたりする姿も多く見られ、絵本に対する興味を引き出す良い機会になったと考える。

##### ●ボードシアター『おべんとうバス』

普段はあまり触れる機会のないボードシアターを取り入れたことで、子どもたちは新鮮さを感じながら、興味津々で活動に参加していた。マジックテープを活用して具材を貼り付ける仕掛けがあったことで、子どもたちは読み聞かせが終わった後も自主的にボードに触れる様子が見られ、継続的な関心を引き出すことができた。

##### ●ダンス『ジャンボリミッキー』

子どもたちが日常的に耳にすることの多い「ジャンボリミッキー」を使用したことで、親しみを持って取り組む姿が多く見られた。音楽に合わせて自由に体を動かしながら、自然とリズム感覚を養うことができたと感じる。笑顔や笑い声も多く見られ、会場全体が一体感を持って楽しめる時間

となったと感じる。

### 【室内自由遊び】

#### ●乳児コーナー

子どもの年齢層が低かったため、それぞれの発達段階に合わせた関わりや環境づくりの視点を得ることができた。特に1歳未満の子どもが寝転んでいる場所に、年齢の高い子どもが来てしまうと危険が生じる可能性があるため、一部の子どもがそのコーナーで遊べなくなってしまうという場面があった。今後は、年齢ごとに遊ぶスペースやおもちゃを分けるなど、安全面に配慮しながら、すべての子どもが安心して楽しく遊べるような環境を整える必要があると感じた。

#### ●ボウリング

子どもが自分の力に合った難易度で楽しめるよう、ボールを投げる位置をカラーテープで3段階に分ける工夫をした。これにより、子どもたち自身がレベルを選びながら主体的に遊びに取り組む姿が多く見られた。また、年齢や発達の異なる子どもたちがそれぞれ楽しめるような配慮ができた点で、よい実践になったと感じた。

#### ●ボールプール

ボールプールという限られた遊びの中でも、飽きがこないようさまざまな遊具や素材を組み合わせて提供したことで、子どもたちは繰り返し楽しみながら遊んでいた。これまでの課題であった「ボールが場外に出る」という問題についても、囲いを用いたことで安全に配慮した環境づくりが実現できた。子どもの安全と遊びの充実を両立する工夫が活かされた活動となった。

#### ●さかなつり

当日は乳児の参加が多かったため、通常の「釣る」形式ではなく、バケツに好きな魚を入れる「魚集め」へと遊びが自然に展開された。バケツにはプラスチック製と画用紙製のものを用意していたため、子どもたちはさまざまな素材の違いを触って感じる事ができた。こうした環境設定により、年齢や発達に応じた遊びの変化に柔軟に対応できた点が良かったと感じた。

### (3)全体の振り返り

2日間にわたる活動を通して、「保育」と「看護」という異なる分野には、一見すると役割や視点に違いがあるようで、実際には“子どもの健やかな成長を支える”という共通の目的があることに気づくことができた。実際に交流を重ねていく中で、保育者は「子どもの遊びや心の成長」に寄り添い、看護職は「子どもの健康や安全」を支えるというように、それぞれの専門性が補い合いながら子どもを支えていることを実感した。

また、「こどもフェスタ」を両分野が協力して運営したことで、それぞれの強みを活かしながら、一つの目標に向かって取り組むことの楽しさや、チームで成し遂げることの達成感も味わうことができた。この経験を通して、異なる立場の人と協働する姿勢や、多角的な視点を持つことの大切さを学ぶことができた。今後もこの学びを大切に、将来、保育の現場でもさまざまな専門職と連携しながら、より良い保育を実践していきたいと思う。



写真1 保育プログラムの様子



写真2 室内自由遊びの様子

## 2. 和歌山信愛大学子どもフェスタ IN みなべ

### (1) 概要

日時：2025年5月18日(日)10:00～12:00 (受付9:45～)

場所：小目津公園

共催：みなべ町

参加人数：大人32名、子ども57名 計89名

スタッフ：みなべ町関係者6名、学生21名、教職員5名

参加者 合計：121名



図1 チラシ

### (2) 報告

みなべ町で開催される「子どもフェスタ」は今年度で4回目となり、初の屋外開催となった。最初は曇り気味のお天気であったが、だんだんと晴れていき最終的には89名もの親子の参加があった。海岸沿いということもあり、時折心地よい風が吹く公園で楽しいひとときを過ごすことができた。

会場が公園内ということもあり、戸外遊びに加えてダンス、しっぽとり、色タッチ、じゃんけん遊び、魚釣り、輪投げ、シャボン玉遊びなど公園全体を使い多彩な活動が展開された。また、子育て相談のブースに加え、OCも同時開催で行われた。子どもたちは元気いっぱい公園を駆け回り、あちこちから歌声や笑い声が響き渡り、にぎやかで活気あふれる雰囲気にもまれていた。

各ブースでは、子どもたちと学生、そして保護者の方々の笑顔があふれ、楽しい時間が流れる中で、気づけば終了の時間を迎えることとなった。

参加した学生たちは、事前に子どもたちに楽しんでもらえるような活動や出し物を考え、何度も試行錯誤を重ねながら準備を進めていた。実際に子どもたちと関わる中で多くのことを学び、新たな気づきや発見があったようで貴重な経験となったようである。

(文責：榎本真伍)

### (3) 学生レポート

#### ① 学生メンバー

4年生1名、3年生14名、2年生3名、1年生3名

#### ② 学生による保育プログラム

##### ●ダンス

「からだだんだん」「ジャンボリミッキー」のダンスを行った。学生は前に立って見本となる動きを示しながら、子どもたちと共に全身運動を楽しんだ。最初は緊張がみられた子どもたちも、音楽が流れだすと元気よくダンスをし始める姿がみられた。



図2 ダンスの様子

●しっぽとり

親子と学生が一緒になって笑い声をあげながら走る姿がみられた。



図3 しっぽとりの様子

●色タッチ

公園内の遊具や地面、自然物を利用して指定された色を「見つけて→触る」という探索と身体活動を組み合わせたことで2~3歳児でも無理なく参加できて自分から色を探しに行くという主体的な姿が引き出された。



図4 色タッチの様子

●じゃんけん遊び

繰り返し挑戦したい気持ちや、人と向き合って関わる力が多く見られた。また、「もう一回挑戦したい」と前向きな言葉が自然に生まれていた。学生が関わることで遊びの輪が広がり、初対面同士の子どもをつなぐきっかけにもなっていた。



図5 じゃんけん遊びの様子

③ 遊び場（学生が主体となり、輪投げ・魚釣り・シャボン玉の3つコーナーを設置した）

●輪投げ

投げる位置や輪をかける対象までの距離を自由に選べるよう環境構成を行ったことで、年齢や発達に応じた挑戦ができ、子ども自身が「ここから投げたい」と決める姿もみられた。

●魚釣り

子どもが保護者や学生に釣れた魚を見せに来ることで、成功体験を共に感じる関わりが多くみられた。

## ●シャボン玉

吹く・追いかける・つかまえようとする・割るなど、多様な身体の動きにつながっており戸外という環境ならではの遊びが感じられた。

### ④ 戸外遊び

公園内ですべり台やブランコ、ボール遊び、鬼ごっこなど子どもたちがそれぞれ楽しみたい遊びを選んで遊べるようにした。決められた活動でなくても、広場で走り回ったり、ボールを投げる・転がすなどの動きを自発的に楽しんでいた。保護者も子どものペースに合わせて見守る姿が多く、学生も必要なタイミングで遊びに参加しながら、安全に過ごせる距離で関わることを意識した。

#### 【学生の感想】

- ・これまで室内で行ってきた活動とは異なり、初めて戸外で開催することができた。
- ・自然物や遊具を見つけて興味を広げる姿が多く見られ、環境が遊びを生み出す力の大きさを改めて実感した。
- ・室内とは違い、活動の範囲が明確に区切られていない分、子どもたちの動きが自然と広がり、それに合わせた関わり方や安全への目配りが必要になることを強く感じた。
- ・初めて外でイベントを運営したことで、環境に応じて援助を変える柔軟さが求められるという学びにつながった。
- ・今後は活動の見通しや環境構成をさらに工夫しながら、誰にとっても参加しやすく、より安心できる子育て支援イベントを目指していきたい。

### (4) 保護者からのアンケート

- ・楽しかったです、魚釣りが盛り上がっていました。
- ・公園でも順番を守って頑張ってルール通りにしていて安心しました。
- ・お兄さん、お姉さんに遊んでもらえて親も楽しかったです。
- ・いろいろな遊びができて楽しかったそうです、ありがとうございました。

### (5) 自治体等からの感想

今年で4回目の開催ですが、いつもたくさんの親子が遊びにきてくれています。今回はお天気にも恵まれ初めて屋外で開催することができました。広い公園で遊具もあったので、子どもたちの興味を引き付けるのにご苦労されたのではないかと思います。学生さんたちは子どもたちが楽しめるように一生懸命声をかけ、関わってくれていました。

保護者の方からも「楽しかったです」「また参加したいです」とお声をいただいています。広い公園での開催こういったフェスタ等を通して保育士の魅力を発信していけたらいいなと思いました。今後のご活躍に期待しています。ありがとうございました。

(みなべ町子育て推進課 副課長 藤井昌代 氏)

### 3. 和歌山信愛大学こどもフェスタ in 本町

#### (1)概要

開催日：2025年7月12日（土）

開催地：和歌山信愛大学

後援：和歌山市

共催：子育て支援ネットワークすくのび

来場者数：大人 55 名、こども 60 名 計 115 名

見学者：テレビ和歌山 2 名、生協関係 2 名 計 4 名

スタッフ：和歌山信愛大学学生 35 名

（4 年 2 名、3 年 26 名、2 年 3 名、1 年 4 名）

和歌山信愛大学「和太鼓サークル」2 名

和歌山県立医科大学薬学部「aimochi」5 名

東京医療保健大学和歌山看護学部（学生 5 名、教職員 2 名）7 名

こども店長「Happiness Kids Labo」（おとな 8 名、こども 13 名）21 名

子育て支援ネットワークすくのび 4 名

教職員 8 名 計 82 名

イベント参加者 計 201 名



図1 イベントチラシ



写真1 集合写真

#### (2) 報告

本フェスタは、後援いただきました和歌山市様、共催していただきました子育て支援ネットワークすくのび様とともに、来場者 115 名を迎え開催しました。今回は初の試みとして、「まちなか 5 大学コラボ」を企画し、和歌山県立医科大学薬学部・東京医療保健大学和歌山看護学部の学生に参加いただいた。それぞれの分野を生かしながら、こどもから大人まで幅広い世代を対象にブース作りし、今までにないこどもフェスタとなった。また「子育て支援ネットワークすくのび」と「Happiness Kids Labo」にも協力いただき、大勢の親子を迎えし、室内では学生と共に音楽とお話を楽しむ絵本の読み聞かせやダンス、健康教室、しんあい LABO など盛りだくさん、また屋外では色水体験や金魚すくい、水鉄砲で全身びしょ濡れになったりと、たくさんの遊びを満喫していた様子であった。さらに、同時開催したオープンキャンパスにご参加いただいた高校生とその保護者の方の見学もあり、保育・子育て支援の魅力も伝えることができた。

参加した学生は、子ども達が楽しむ姿を想像しながら、しんあい LABO では試行錯誤を繰り返し、ダンスでは左右を考えて練習したり、絵本の読み聞かせではスピードや音量を調整し練習したりと、一生懸命、準備していた。さらに、他大学の交流もあり、ミーティングを丁寧に言い、進捗を合わせ、時には手伝い合い・支え合っている姿を見ることができた。

和歌山市の関係者の方々をはじめ、地域の方々、ご参加下さった皆様に心より感謝すると共に、来年度も皆様と共に、素敵な時間を過ごせることを楽しみにしております。（文責 飯田まなみ）

### (3)学生レポート

#### 1.活動内容

##### ①学生による 30 分間の保育プログラム

- ・大型絵本「きんぎょがにげた」「はらぺこあおむし」
- ・手遊び「さかながはねて」「キャベツのなかから」「パンダウサギコアラ」
- ・みんなでダンス「ジャンボリミッキー」「からだ☆ダンダン」

##### ②縁日（さかなつり、わなげ）

##### ③乳児スペース（ボールプール、おもちゃ、ひのきくん）

こども店長（うちわ作り、射的、ぬいぐるみ揃い、ボール当て）

##### ④まちなか3大学フェス（モグラたたき、健康教室、しんあい LABO）

##### ⑤外遊び（ふしぎ！いろみずたいけん、おもちゃの金魚すくい、水鉄砲）

#### 2.各活動内及び学生レポート

##### ①学生による 30 分間の保育プログラム



写真 2 手遊び

絵本が始まると一気に物語の世界に引き込まれ、学生の「さかなはどこかな」という声かけに、こどもが「ここ！」と指差しする様子が見られた。ページをめくる度に「あっ！」という声も聞こえ、絵本のもつ力を改めて感じた。また、「みんなでダンス」では、音楽に合わせて体を動かしたり笑顔溢れる時間となった。始めは緊張していたこどもたちも、保護者の方と手を繋いで体を動かすと自然と笑顔になった。学生や保護者の声かけが子どもに安心感を与えている様子が見られ、温かい雰囲気にも包まれていた。

今回のこどもフェスタで絵本の読み聞かせと手遊びを担当しましたが、子どもたちが楽しそうに絵本の絵を指さしたり夢中で見てくれている姿を見てとても嬉しく思いました。また、子どもの予想外の反応や行動に対応できなかったことが反省点です。子どもの楽しそうな姿をみると、改めて保育者になるために今後もこのような子どもと関わるイベントに参加し必要な知識や能力を高めていきたいと思いました。



写真 3 大型絵本の読み聞かせ



写真 4 ダンスの様子

普段子どもたちと関わる機会が少ない中たくさん笑顔や一緒に遊ぶ経験させて頂いて本当に楽しくボランティア出来ました。ダンスも友達とするだけでなく子どもたちと一緒に踊ることにより盛り上がり、自分が子どもの頃に戻ったかのように全力で楽しめました。短い時間でしたが温かい交流が出来たことに感謝しています。



写真 5 手遊びの様子

私はダンスプログラムでからだダンダンとジャンボリミッキーを子ども達と踊りました。子どもの前でお手本となるように体を大きく使い、声かけをしながらダンスをしました。子ども達が笑顔でダンスをしている姿を見て自信が付いたのでこれからもさまざまダンスを練習して子ども達が楽しく踊ることができるプログラムを考えたいと思いました。

## ②縁日（さかなつり、わなげ）

縁日スペースでは、子どもの活動を見守りながら「わなげ」の輪を渡すなどの手助けをした。同じ遊び道具でも子ども一人ひとり遊び方が違うことが分かった。さかなつりでは、「大きな魚だ!」「あれ、釣りたい!」といった声が聞こえてきた。それぞれが目標をもって遊んでいる様子があり、一生懸命に取り組んでいた。



写真 6 さかなつり

## ③乳児スペース、こども店長



写真 7 こども店長

乳児スペースでは、主に子どもがしている活動を学生が見守り、我が子に対する保護者の思いや相談を子育て支援ネットワークすくのびが受けた。保護者の方が安心して子育てができるよう、子どもと親を支える取り組みを行った。

こども店長では、小学生が作った射的などを通してお店屋さんごっこを行った。300円チケット配布し、数量認識やお金の大切さを、遊びを通して学んでいる様子が見られた。かわいい店員さん達が活躍し、楽しい催しとなった。

#### ④まちなか3大学フェス（モグラたたき、健康教室、しんあい LABO）

和歌山市内にある3大学が集まり、親子が楽しめるブースをそれぞれが用意した。和歌山信愛大学は、夏の製作として「万華鏡づくり」（先着10組）を行った。「覗いたらどんな世界が見えるかな」という学生の声かけのもと、子どもたちが自由にビーズを選び、お気に入りの「万華鏡」を作った。万華鏡が完成すると中を覗いて保護者に見せたり、振って音を出したりと、様々な楽しみ方が見られた。不思議な世界だったのか真剣に覗き込む表情にも癒された。



写真8 万華鏡づくり

私は、今回2度目の子どもフェスタの参加で、万華鏡作りのサポートをさせていただきました。ビーズやスパンコールを取りやすくする工夫や、折り紙を貼る場面で援助が必要か考えながら、臨機応変に対応する大切さを学びました。また、先輩やその他関係者の方の子どもとの関わり方を学び、今後の保育に活かしていきたいと感じました。



写真9 万華鏡づくり

#### \*東京医療保健大学和歌山看護学部



写真10 健康教室

他大学の学生と関わることができ、新しい発見や学びがあり、とても良い経験になりました。また、子どもたちとふれ合う中で、たくさんの笑顔に触れ、こちらまで元気をもらいました！血圧測定や握力測定も実施し、参加した方々の健康づくりに少しでも役立てたのかなと思うとよい経験になりました。今回の学びを自身のスキルアップにも活かしていけたらと思います。

#### \*和歌山県立医科大学薬学部「aimochi」

私は薬学部の学生ですが、以前から子どもや子育ての分野に関心を持ってきました。普段子どもたちや子育て世代の方と関わることはあまりないため、親子向けのイベントであるこどもフェスタにブース出展できることを知り参加を決めました。当日は実際に子どもたちと一緒に遊ぶことができ、とても楽しく貴重な経験となりました。教育や保育を専門とする信愛大学の皆さんの子どもへの接し方はとても上手で、多くの学びがありました。今回のイベントへの参加を通して、将来は妊婦や授乳婦への薬物治療を専門とする薬剤師になり、医療の側面から安心して子育てできる環境づくりに関わりたいという想いが強まりました。



写真11 もぐらたたき

### ⑤外遊び（ふしぎ！いろみずたいけん、おもちゃの金魚すくい、水鉄砲）

外遊びでは、子どもたちがペットボトルでバケツやシャワーを作り、それを基に色水や水遊びをするという活動を行った。子どもたちそれぞれがペンで装飾をし、自分好みのペットボトルシャワーを作った。いろいろな色の水をシャワーに入れ、キャンバスに浮き上がる絵を楽しんだ。



写真 12 水鉄砲



写真 13 いろみずたいけん

外遊びの色水を担当しました。ここでは色水をペットボトルシャワーで汲み、紙にかけるとロウで描いた絵が浮かび上がるという遊びをしました。こどもたちは色水を紙にかけると発色することや紙から文字が浮かび上がることに興味津々でした。中には、色水が服につくのが抵抗のある子もいました。そのようなこどもたちにも配慮した用意をしていたため、みんなに楽しんでいただけて嬉しかったです。色水を流して通常の水道水を用意した際は、ペットボトルシャワーの水の出方を面白そうに見ていたり、水を自分にかけて冷たそうにしていたりして楽しく遊ぶ姿もありました。このように同じもので他の遊びに展開できる活動ができたと思います。



写真 14 水鉄砲



写真 15 いろみずたいけん

### (3) 学生の感想

こどもフェスタを通して、改めて地域での子育ての大切さに気づくことができました。園や家庭での保育に加え、たくさんの人々と出会い関わる中で、子どもにとっても、私たち学生にとっても素晴らしい経験をすると思いました。また、一人ひとりと丁寧に向き合う時間が多くあり、子ども理解力を育むことにも繋がりました。このような貴重な経験を、実習や保育に活かしていきたいと思います。

こどもフェスタに参加して、私は様々なことを学ぶことができた。その中でも、最も印象的だったのが、子ども一人ひとりに応じた関わりや保育をすることの重要性についてだ。こどもフェスタに参加していた子どもの年齢層は様々で、独り歩きが難しい子もいれば、1人でぐんぐんと走っていくよ

うな子どももいた。様々な子どもがいる中で、子どもの行動をしっかりと受け止め、また子どもが自分で気づいて様々なことに挑戦し、発見することができるように、見守り、支援することが非常に大切だと思った。また、子どもの性格が十人十色な様に、保護者の方も子どもに対する悩みや育児不安を抱えているため、その不安を少しでも解消し、楽しく育児ができる第一歩になれるような援助が非常に大切だと学ぶことができた。

準備後半では話し合いも積極的に参加でき、前日の準備は遅くまで頑張った。こどもフェスタを終えて、自分たちが考えた遊びで子どもたちが笑顔で楽しそうに遊んでいる姿や「楽しい」「またやりたい」といった声を聞いて、ほんとに頑張って取り組んでよかったと思ったし、何よりそれらを見て今後も頑張ろうという元気をもらえた。

私は外遊びを担当することになりました。去年とは違い、今年はペットボトルでバケツやシャワーを作り、子どもたちに装飾してもらい、それを基に色水や水遊びをするという活動を企画しました。実際の活動の中で、当初はバケツやシャワーで水を掛け合うという流れのつもりが、水鉄砲に惹かれる子どもが多く、製作したものを子どもがあまり使わずに遊んでいました。自分の企画力の無さに落ち込んでいると、子どもたちがスーパーボールすくいのカゴの代わりにバケツを使ったり、色水でシャワーを用いたりと様々な用途が見られました。子どもの想像力の豊かさに救われたのと同時に、子どもの無限大の可能性が垣間見えた瞬間だったと感じました。子どもの自由を広げるこのフェスタの魅力を今後も発信していき、少しでも子育て中の保護者の方の助けになったらと思いました。

こどもフェスタを通して、私は子どもの興味に寄り添った関わりと大切さを知ることが出来た。私は外遊びの担当をさせてもらいました。そこでは楽しそうに色水をペットボトルにいれ、半紙にかけて絵が浮かび上がる工程を楽しんでいる子ども達の様子を見ていて、私も楽しくなっていました。しかし、その工程を楽しむのではなく、色水を混ぜたり、半紙関係なくかけに行ったりすることに興味を示す子ども達も中にはいました。その際は、臨機応変に色水を混ぜることができる場所を作ったり、色水をかける的を作ったりと対応できたことは良かったと感じました。次回は、自分たちが作った遊び以外の方法に興味を示して楽しむ子どももいることを予想し、それぞれの興味に寄り添った遊びができるようにしたいと感じられる良い経験になりました。

今回のこどもフェスタを通して、何事も臨機応変に対応することの大切さや事前準備の重要性に改めて気づくことができました。こどもフェスタが行われる前日まで、万華鏡に入れるビーズの種類はどうか、年齢問わず楽しんでもらえるようにするためにはどうすればよいかなど、様々なことで悩みました。しかし当日子どもたちが自分で作った万華鏡を覗いて喜ぶ姿を見て、たくさん悩んだ甲斐があったと感じるだけでなく、私自身も嬉しくなりました。今回の貴重な経験を元に、今後の実習や将来に活かしたい。

こどもフェスタに参加して、様々な人と出会い、関わって、子どもも私たちも多くの経験ができたことから、地域と繋がり、地域で子育てしていくことが大切であると感じました。また、様々な年齢の子どもが来てくれ、中には援助が必要な子どももいた事から、誰もが安心して楽しめる環境づくりの大切さも学ぶことができました。今回の経験・学びを今後の実習などに活かしていきたい。

私は今回のこどもフェスタで不思議色水遊びのリーダーをやらせていただきました。私は、これを実行するにあたって様々な壁にぶつかりました。しかし共にその壁と向き合い絶対にできると信じ手伝ってくれたチームの方々には感謝の言葉しかありません。そして、その甲斐もありたくさんの子どもの笑顔を見ることができました。もちろん反省もあります。一番大きな反省は、子どもの服に色水が付くことへの配慮をし切ることができなかったことです。突貫でビニールを持ち上げその上から色水をかけてもらいましたが、それだと子どもは不自由に感じただろう。その対応には人数や実施に手間がかかってしまうなど様々な問題があります。また、今回半紙を使ってやったこともあり少し発色が悪く破れてしまったものもあったので素材にもこだわりたいと感じました。よって、次回実施するときはこれらにしっかりと配慮し、よりよく発色ができるよう工夫したいと思います。

事前準備の段階からフェスタ終了まで、自分にとって様々な学びに繋がる時間でした。今回は他大学の方々の協力もあって、今までより規模の大きいイベントになったのではないかと思います。多くのメンバーが力を合わせて用意した企画で元気に遊ぶ子ども達の姿を見て、とてもやりがいを感じました。特に自分が担当した水鉄砲遊びでは、大学生と追いかけて遊ぶ子どもの様子を見て、自然と参加してくれる子どもが増えてきたのが分かりました。様々な年代の子どもがそれぞれの好みや個性を生かしながら楽しく関わるができるということが、こどもフェスタの大きな魅力だと実感できました。

#### 〈共催者からの感想〉

昨年に引き続き2回目の参加でした。前回の課題としてあげさせてもらった拠点メンバーと学生との顔合わせがあったのが良かったです。また、拠点メンバーも名札を付けたことにより、参加者の親子にもわかりやすかったのではないかと思います。学生が作ったボールプールが大人気でいろいろな年齢の子どもたちが一緒にあそぶ姿もありました。他大学の学生もたくさん参加していて、学生たちのいきいきした表情を見ていると、こちらも刺激をもらい明日からまた頑張ろう！という気持ちにさせてもらいました。

きのくに子ども NPO 和歌山市地域子育て支援拠点 ほっとルームぐるんぱ 田中麻紀 氏

## 4. 和歌山信愛大学こどもフェスタ in ありだ

### (1) 概要

日時：2025年10月26日(日)13:30～15:00（受付13:00～）

場所：有田市文化福祉センター

共催：有田市

参加人数：大人40名、こども39名 計79名

スタッフ：学生19名（4年生2名、3年生14名、1年生3名）、  
有田市関係者16名、教職員8名

参加者 合計：122名



図1 チラシ

### (2) 報告

有田市で開催される「こどもフェスタ」は、今年度で5回目となりました。当日はあいにくのお天気でしたが、79名もの親子が参加していただき、楽しいひとときを共に過ごすことができました。また、有田市長様、有田教育長様、副支部長様にもお忙しい中、最後までご参加いただき、誠にありがとうございました。

会場では、保育プログラム、たのしいひろば、子育て相談のブースに加え、演劇サークルと有志学生による「劇」や紙皿バックのワークショップ、シールラリーなど、多彩な活動が展開されました。子どもたちは元気いっぱいに会場を駆け回り、保護者の方々も一緒に製作を楽しむなど、親子で笑顔を交わす場面が多く見られました。会場のあちらこちらからは歌声や笑い声、「やったー！」「できた！！」という歓声が響き渡り、にぎやかで活気あふれる雰囲気にも包まれていました。各ブースでは、子どもたちと学生、そして保護者の方々の笑顔があふれ、楽しい時間が流れる中で、気づけば終了の時間を迎えていました。

シールラリーでは、初めて会うお兄さんやお姉さんに少しずつ近づき、緊張しながらも勇気を出して声をかける子どもたちの姿が見られました。輪投げやボウリングでは、学生とハイタッチを交わしながら喜ぶ子どもたちの笑顔が印象的でした。

参加した学生たちは、幅広い年齢の子どもたちに楽しんでもらえるような活動や出し物を考え、試行錯誤を重ねながら準備を進めていました。実際に子どもたちと関わる中で、多くのことを学び、新たな気づきや発見があったようで、貴重な経験となったようです。

有田市の関係者の皆様をはじめ、地域の方々、ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。今後も皆様と共に、心あたたまるひとときを分かち合えることを楽しみにしております。

（文責：前島美保）



### (3)学生レポート

#### ①プログラム

- 1.挨拶（有田市長様・学生）
- 2.劇『もりのおばけ』
- 3.親子体操
- 4.自由遊び『たのしいひろば』
- 5.子育て相談

#### ②活動内容と担当した学生の感想

##### 【劇『もりのおばけ』】

今回は、新しい取り組みである劇『もりのおばけ』という劇を行った。主人公のねずみ“ちゅうた”は、友達から「森におばけが出る」という噂を聞き、その真相を確かめようと決意する。森へ向かう途中、カエルの鳴き声「ケロケロ」や風の音「ヒューン」、虫の音「カサカサ」など、さまざまな自然の音に驚きながらも、その正体が“おばけではない”ことをひとつずつ確認していく。カエル役は《かえるの合唱》を、風役は《かぜよふけふけ》を、虫役は《虫の声》を歌い、音や楽器を通して、森の世界を豊かに表現する。

物語の終盤、白いシーツをかぶった“おばけ”が登場するが、その正体は森のくまであった。誤解が解けるとみんな仲良くなり、最後に全員で《森のくまさん》を歌って、明るく締めくくる。森の自然の音を楽しみながら、怖いと思っていたものの正体が実は友達だった、という温かいお話である。

子どもたちは手の振り付けを模倣したり、台詞に反応を示したりしており、今回の劇は発達や興味・関心に合った内容であったと考えられる。しかし一方で、子ども達の反応を表情やアドリブなどで受けとめ、会場が一体となって劇を楽しむような工夫も良いのではないかと感じた。



写真1 劇『もりのおばけ』

##### 【親子体操】

親子体操として楽曲《だるまさんが》と《からだダンダン》を行った。これにより、子ども達の身体の動きだけでなく、親子の関わりがより一層深まる様子が見られた。活動を通して、親子が同じ動きを共有する楽しさを味わい、安心感のある関係づくりや運動への意欲向上に繋がったと感じた。

絵本『だるまさんが』を読み聞かせると、子ども達はユーモラスな世界に引き込まれ、「どてっ」「ぷしっ」などの表現を声に出して楽しんでいた。その後の親子体操では、子ども達が“だるまさん”になりきって体を揺らしたり、転がる真似をしたりと、絵本の世界を身体で表現する姿が見られた。保護者の方も子どもの動きに合わせてゆっくり支えたり、一緒に動きを真似したりすることで、笑顔が多く見られた。

特に「にこっ」で親子が顔を見合わせる場面があり、子どもたちの安心した表情が印象的で、親子の距離がぐっと近づいていた。その後の自由遊びでは、初めて出会う家庭同士が自然に声を掛け合い、



写真2 親子体操

子ども達も興味のある遊具に触れながら、伸び伸びと活動する姿が見られた。

### 【はらぺこ動物】

子どもフェスタでは、参加する子どもたちの年齢が幅広いため、事前に口の大きさを変える、ボールを色ごとに分けておくなど、ゲームの難易度をかえるよう工夫した。また子どもたちが途中で飽きないように、動物を上下左右に動かすなどして、発達に応じた関わりを臨機応変に行うことができた。一方で、改善点としては「混雑時の子どもへの声掛け」、「ボールの量の調整(多すぎず、少なすぎず)」、「遊びの展開が弱い」という3つが挙げられる。今回の“はらぺこ動物”は初めての試みであったため、今後はこれらの反省を活かし、より良い活動へと改善していきたい。



写真3 はらぺこ動物

### 【ボーリングコーナー】

今回の子どもフェスタは屋内で開催されたため、子ども達は様々なコーナーを行き来しながら楽しめるよう工夫が凝らされていたと感じる。私が担当した“ボーリングコーナー”では、子ども達がボールを転がしてピンを倒す一連の流れに、一生懸命挑戦する姿が見られた。サークルの仲間の協力もあり、順番や遊び方に関するトラブルもなく、子ども達が円滑に遊べていたことが良かった点だと思う。今後も、本イベントを通して子ども達が様々な体験を楽しめるよう、改善や工夫を重ねていきたい。



写真4 ボーリングコーナー

### 【シールラリー】

シールラリーでは、最後に「ど・ん・ぐ・り」という言葉が完成するようにシール集める活動を行った。学生はウサギのビブスを着用し、子ども達はお兄さんやお姉さんを探しながら参加していた。笑顔で触れ合う姿が多く見られ、温かい雰囲気を感じられた。



写真5 シールラリー

### 【秋の製作『ハロウィンの紙皿バッグ』】

季節の行事に合わせて「ハロウィン紙皿バッグ」の製作活動を行った。秋ならではのモチーフを取り入れた活動は、子ども達の興味を引きやすく、導入の段階から「今日は何を作るの?」と期待をもって集まる姿が見られた。製作では、紙皿に好きなイラストを描いたり、かぼちゃの顔を自由に描いたりする工程があり、一人ひとりの個性が際立つ時間となった。活動中には、完成図をイメージしながら自分なりの表現を楽しむ子どもや友達の作品を参考にして、アイデアを膨らませる子どもなど、創造性の広がりを感じる場面が多く見られ



写真6 ハロウィンの紙皿バッグ

た。完成したバッグを嬉しそうに見せる姿からは、達成感や自肯定感を育む有意義な活動となったことがうかがえた。

### (3)自治体等からの感想

会場施設が工事中の上、悪天候も重なりましたが、イベントを楽しみにしてくれていた大勢の家族が参加されていました。やはり、例年より参加数は少なく感じましたが、その分ゆったりと家族一緒に何度も繰り返しいろんな遊びを楽しめていたように思います。

緊張感のある学生や、元気いっぱい表現できている学生、一緒に楽しみながら関わっている学生、それぞれ初々しく感じました。企画から準備、そしてこのイベントをやり遂げ、反省点もあるかと思いますが、自信に繋がったのではないのでしょうか。来年度も楽しみにしています。

(有田市市民福祉部子ども課 係長 前川加津 氏)



写真7 イベントの様子①



写真 8 イベントの様子②



写真9 舞台を楽しむ様子



写真10 集合写真

## 【研究・ひろば・イベント等の協力】

### 1. 高野山で体験しよう

#### 「伊都地方子ども地域体験交流事業 in 高野山」

伊都地方子ども育成事業実行委員会が主催した「伊都地方子ども地域体験交流事業」に学生スタッフとして参加させていただいた。

日時：2024年11月24日（日） 8:00～17:10

場所：高野山

主催：和歌山県世界遺産高野地域協議会

参加人数：橋本市・伊都管内の小学5、6年30名  
学生3名

#### 〈本事業の目的〉

伊都地方の子どもたちの健全な育成を願う行政機関と民間団体が協力して、地域の子どもたちに伊都地方が有する自然・文化等のすばらしさを体験し、環境保護等について学ぶとともに子ども同士が交流する機会を提供することを目的とする。

#### 〈学生の役割〉

小学生30名の子どもに寄り添いながら、活動をサポートする。

#### 〈子どもたちの活動内容〉

- ・子ども店長 子どもたちがコンビニで仕事を体験し、品出しやレジの袋詰め等を行った。
- ・子どもガイド 子どもたちが通訳者とともに、外国人に金剛峯寺の名所について英語によるガイドを行った。
- ・ごま豆腐づくり 精進料理の代表となるごま豆腐の作り方を教えてもらい、体験した。

#### 〈学生レポート〉

##### (1) 学生メンバー

1年生：3名

##### (2) 学生の感想

チームで活動を中心に行っていたので、全員が初対面でも活動を通して心を開き仲良くなる場所を間近で見ることができた。子どもたちの何事にもあきらめないところに感動した。

このボランティアを通して、この企画をしてくださったスタッフの方、地域の人や外国人の人たちと交流できて、和歌山のことについてたくさん知ることができた。子どもたちと関わってたくさんの子どものことをまとめて行動することの難しさを知り、学ぶことができた。



写真 1 橋本駅でのオリエンテーション



写真 2 コンビニの子ども店長の様子



写真 3 ごま豆腐づくりの様子

〈自治体からの感想〉

高野山が紅葉の時期ということもあり、大勢のインバウンドで賑わっていました。その中で、和歌山信愛大学の学生、ジュニアリーダーにスタッフとして参加してもらえたことは非常に頼もしく、助かりました。おかげでスムーズに事業を行うことができました。グループごとにスタッフとして入ってもらうことで、参加児童は安心してのびのびと活動に取り組むことができました。このような事業に、また参加してもらえると嬉しいです。ありがとうございました。

(和歌山県伊都振興局 地域づくり部 総務県民課 主査 大城裕規 氏)

## 2. わくわくキャンプ

### 伊都地方子ども地域体験交流事業

～ここでしか出会うことのない仲間たちと最高の思い出を作ろう！～

日時：2025年3月1日（土）～3月2日（日）

場所：紀北青少年の家

主催：伊都地方子ども育成事業実行委員会

スタッフ：学生5名

#### 【目的】

伊都地方の子供たちの健全な育成を願う行政機関と民間団体が協力して、地域の子供たちに伊都地方が有する自然・文化等の素晴らしさを体験し、環境保護等について学ぶとともに子ども同士が交流する機会を提供することを目的とする。

#### (1) 学生メンバー

3年生：2名

2年生：3名

#### (2) 活動内容

～1日目～

##### ①アイスブレイキング

自己紹介を交えながら体を動かす。

##### ②KYT トレーニング

KYT とは、危険を予知する能力を高めるトレーニングである。KYT をすることによって安全能力を向上させる。

##### ③野外炊事（カレー作り）

子ども一人ひとりが自分の役割を持って積極的に行動する。

##### ④キャンプファイヤー

バースデーチェーン（誕生日順に並ぶ）やジェスチャーゲームなどのゲームを通し楽しむ。

～2日目～

##### ⑤館内サーチ

館内にあるなぞなぞや都道府県クイズを解く。

##### ⑥ニュースポーツ

ボッチャやドッジビーを通して楽しく遊ぶ。

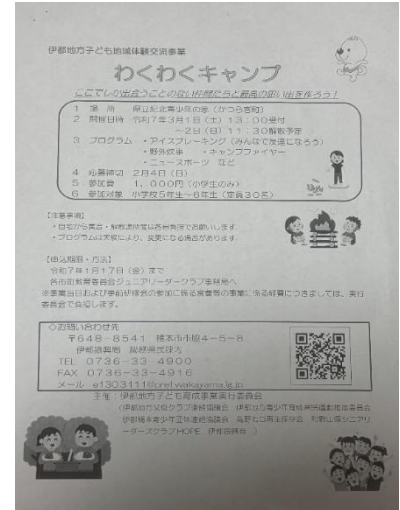


図1 参加者募集のチラシ

〈参加学生の感想〉

- ① 私が小学生の頃に行ったようなプログラムのキャンプの運営側にさせていただき、プログラムの組み方は、どのような配慮が必要なのかなどを学ぶことができました。単純に野外炊飯でカレーを作るといってもカレーによるアレルギーはもちろんですが、煙への配慮が必要とされる子どもがいるなどがあり、あらゆる可能性を考えて運営を行う必要があることを学びました。キャンプに関わらず子どもへの配慮の広さを学び今後を活用していきたいです。
- ② 初めて出会う友達同士で活動一つひとつに熱心に取り組む姿が印象的でした。スタッフとして参加しましたが、高学年の子供たちの意欲や無邪気さというものを間近で体験することができ、学びながらも充実した2日間でした。



写真1 自己紹介している様子



写真2 KYTトレーニングの発表している様子



写真3 火を起こしている様子



写真4 カレーを食べている様子



写真5 キャンプファイヤー点火している様子



写真6 ポッチャしている様子

### 3. 森下ゼミの地域交流の報告

2017年度に、一般社団法人全国保育士養成協議会研究助成事業の研究助成を受けて、研究テーマ「郷土愛を育む保育教材の開発を通じた保育者養成校と自治体との連携・協働に関する研究 - 地域に伝わる民話・わらべうた・美術作品に焦点を当てて -」に、研究代表者の森下順子、共同研究者の花岡隆行（現：鎌倉女子大学）、野村真弘（現：島根大学）、伊原木幸馬（現：千里金蘭大学）の4名で保育教材開発研究会として取り組んだ。連携自治体である岩出市のご協力のもと、岩出市の民話「住蛇が池」を掘り起こし、子どもにもわかりやすいように紙芝居を制作した。また読み聞かせの中に、岩出にまつわるわらべうた等を交えて、地域の伝統文化を継承するための作品を作り上げた。

今年度は、大阪観光大学主催の「音楽で『旅』するコンサート」と、岩出市立山崎小学校で1年生に向けて、森下ゼミ生が、作品「住蛇が池」の紙芝居を発表した。（文責：森下順子）

#### (1)大阪観光大学音楽で「旅」するコンサート Vol.2 に参加

日時：2025年7月2日（水）開演 18:30

場所：熊取町文化ホールキテーネホール

主催：大阪観光大学

参加人数：森下ゼミ生 13名

#### 〈ゼミ生の感想〉

会場へ入った時、席にはたくさんの来場者がいてこんな大きな舞台上で歌うことができるのか、不安や緊張でいっぱいでした。開演までの時間は伊原木先生のご指導のもと、本番に向けて発声の練習をしながら完成度を高めていきました。「住蛇が池」の発表は老若男女問わず楽しめる内容のものとなっていて、私自身もこんなお話があったのかと学ぶことができました。練習までは緊張していましたが実際に舞台に立ち、本番ではこれまでの緊張が嘘のように消え、堂々とした姿勢で楽しく歌うことが出来たと思います。客席では笑顔で発表を聞いて下さる方々の姿が見られ、地域に受け継がれてきた民話を来場者の方々へ届けることが出来たと思います。また他大学の学生の方々との交流もあり、力強い発表や司会などの運営を務める姿から学ぶことや得られる刺激が多くありました。今回の経験は非常に貴重なものであったので、これからの保育に生かしていければいいなと思いました。



図1 チラシ



写真1 出演者の集合写真

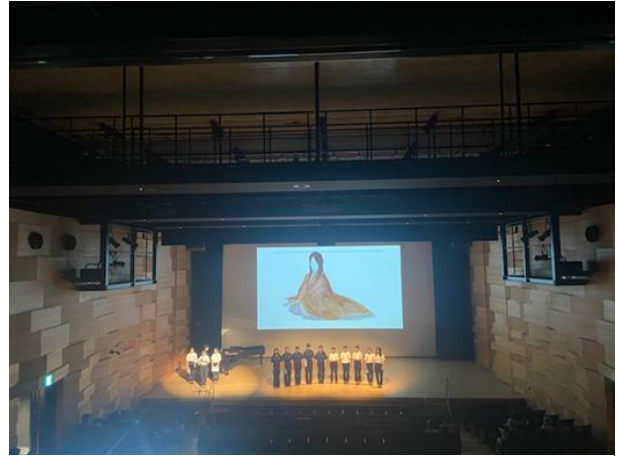


写真2 「住蛇が池」の紙芝居 発表の様子

#### 〈主催者の感想〉

大阪観光大学音楽関連科目による主催事業「音楽で『旅』するコンサート」において、Vol.2は主たるテーマを「子守唄」と設定し、2025年7月2日(水)熊取町文化ホールキテーネホールにて開催しました。大阪観光大学の特色である在籍学生の7割以上が外国人学生であることに鑑みて、ベトナムの子守唄《Cò Là (コウノトリ)》の発表、インドの子守唄をモチーフに創作されたヴァイオリンとピアノのための作品《Jhula Jhule》などの演奏、山田耕筰作曲《中国地方の子守り唄》の声楽演奏に加えて、森下ゼミの学生さんたちによる「住蛇が池」の発表をしていただきました。

6月18日に歌唱指導のために和歌山信愛大学を伺いましたが、森下ゼミの学生さんたちの豊かな表現力とのびのびと楽しく学ぶ姿勢に感心しながら、こちらでも楽しくレッスンさせていただきました。

コンサート本番では、緩急の間合いのとれた朗読に加え、声の揃った歌に、演技も盛り込み、聴衆は学生さんたちが織り成す「住蛇が池」の世界観に引き込まれていました。和歌山県岩出市に伝わるわらべうたや民話を通して、素敵な文化交流ができました。さらに継承・発展していきますように…。

(大阪観光大学客員准教授 伊原木幸馬 氏)

## (2)根来の子守唄出前授業 岩出市立山崎小学校 1年生へ紙芝居「住蛇が池」の読み聞かせ

日時：2025年11月17日（月）9:30～10:15

場所：山崎小学校体育館

参加人数：森下ゼミ生5名

### 〈ゼミ生の感想〉

私たち学生自身も、「住蛇が池」の話を活動に参加するまで知りませんでしたが、紙芝居や紙芝居に含まれる子守唄を通して、話を理解するために、昔の人々が伝えたかったことは何かを考えるきっかけになりました。今回の活動では、小学生と一緒に、実際の住蛇が池の場所や子守唄の意味等を、市職員の方や子守唄保存会の方々から学ぶことができ、より具体的に物語のイメージが膨らむとともに、足を運んでみたい



写真3 発表の様子

とさらに興味が湧きました。紙芝居の内容は、一年生にとっては難しい言葉が遣われていたり、話が長かったりと集中して最後まで聞いてもらえるか不安でしたが、表情や声色を少しずつ変えながら話したり、子守唄の背景を想像しながら歌ったりしたことで、子どもたちが真剣に聞いてくれる中で、笑顔も見られたことが非常に嬉しかったです。和歌山県の昔話や子守唄を、様々な形で未来の子どもへ受け継いでいくことができるように、これからもこのような活動が続くことを願っています。

### 〈自治体からのコメント〉

これまで、紙芝居「住蛇が池」を教材に使用したふるさと学習を根来小学校と山崎北小学校で実施してきました。その実践を踏まえ令和7年度からは、岩出市内のすべての小学校（6校）の一年生を対象としたふるさと学習を行うことになりました。

根来の子守唄の中でも唄い継がれてきた「住蛇が池」の物語をとおして、子どもたちが自分たちの住んでいる身近な地域のことに興味を持ってもらうことを目的に根来の子守唄保存会の皆さんと協働で授業を行いました。

森下ゼミ生の皆さんには、山崎小学校の子どもたちに「住蛇が池」の紙芝居を発表していただきました。

子どもたちは、お姉さんたちが一生懸命お話ししてくれている姿に共感して、物語を理解しようとしてくれていたと思います。

お別れの時に、子どもたちがお礼を伝えるとともに笑顔でハイタッチしている姿を見て、授業を実践してよかったと感じました。今後も、官・学が連携した取り組みを企画し実践していければと思っています。

（岩出市教育委員会生涯学習課 課長補佐 本多元成 氏）

## 4. 算数おもちゃ箱

～頭を使って楽しもう！～

和歌山信愛大学 原啓司研究室

今年度から始めた「算数おもちゃ箱」は原啓司研究室が中心となって企画したものである。これには和歌山信愛大学生が、算数ゲームやパズル、ものづくり等を通して地域の子どもたちと交流し、子どもたちが算数の面白さや頭を使う楽しさを味わい、算数という教科に親しみと面白みを深めるというねらいがある。

また、学生にとってもゲーム等を通して子どもたちとふれあい、子どもたちが活動している様子から数概念や図形についての認識を深めていく様子を学ぶ機会となり、将来教職の道に進む意識づけとするものもある。

子ども、学生、保護者といった参加者全員が、算数・数学の面白さを体験すること、そして何より楽しむことを目的とし、今年度は、8月23日（土）と10月11日（土）の2回、和歌山信愛大学オープンキャンパスとの共同開催の形を取り実施した。参加児童については、和歌山市立虎伏羲務教育学校と大新小学校に案内チラシを配付し募集した。



写真1 算数おもちゃ箱お迎え看板

### (1)第1回 算数おもちゃ箱

2025年8月23日（土）和歌山信愛大学2号館1階 中講義室2

参加：児童4名 保護者6名 学生9名

<主な出展物> 六角形ジャマイカ(六角形のからくり折り紙)、ストロー多面体づくり、折り紙で図形づくり、変顔づくりパズル、算数ゲーム「九九じゃん」、数字当て推理ゲーム「ドメオ」など

### (2)第2回 算数おもちゃ箱

2025年10月11日（土）和歌山信愛大学3号館 学生ラウンジ2

参加：児童3名 保護者5名 学生2名 一般教職員2名

<主な出展物> 六角形ジャマイカ(六角形のからくり折り紙)、ストロー多面体づくり、ディドニーのカンタベリーパズル、ソーマキューブ、変顔づくりパズル、九九コイン取りゲーム、算数ゲーム「九九じゃん」、数字当て推理ゲーム「ドメオ」など



写真2 ゲームやパズルに取り組んでいる様子

### 学 生 の 感 想

#### ○算数おもちゃ箱の可能性

小学校の児童向けに初めての試みとして算数おもちゃ箱を開催し、今回は、折り紙やプラスチックを使った立体づくりなど図形を主に扱いました。児童によっては学校で学ぶ図形の学習というのは難しいと感じる子もいると思います。そんな児童が楽しく自分のペースで学びを深めることができる機会になると感じました。また、保護者の方も一緒になって取り組んだり、子どもが熱心に取り組む様子を近くで見たりと、成長を垣間見ることができる場なっていると思いました。

#### ○楽しむことが算数の本質につながる

初めて算数おもちゃ箱に参加しました。僕が印象に残っているのは、1人の男の子です。それは、正三角形・正方形にするパズルに夢中になっていたことです。正三角形はすぐできたものの、正方形には時間がかかっていました。しかし、正方形が完成したとき、その子は、なんとも言えない笑顔でした。その様子から、算数には、そのように夢中になって、まるでおもちゃを触っているように問題を解く楽しさがあり、それが算数の本質につながるのだということを改めて思いました。

## 5. 学外での音楽サークルおよびダンスの出演

今年度、本学の音楽サークルおよびダンスサークルに対し、初めて外部団体から出演依頼があった。本稿では、今年度実施した2件の地域連携による出演活動についてその概要を報告する。

### (1) 和歌山市みその商店街における音楽サークルへの出演

- ① 日時：2025年10月4日（土）
- ② 会場：和歌山市みその商店街特設ステージ
- ③ 出演：音楽サークル（2年5名、1年生1名）

本出演は、和歌山青年会議所が毎年開催している「POWER OF わかやま」において実施されたものである。2025年は「ミライトモス」をテーマに開催された。当日は、市内5大学の音楽サークルなどが出演し、本学音楽サークルがトップバッターとして参加した。2つのバンドを編成し、計3曲の演奏を披露した。



図1 チラシ

#### 【学生のコメント】

音楽サークルとしては初めての学外での演奏は、普段の定期ライブや学祭とは異なり緊張もあったが、商店街に聴きにきていただいた方に音楽を届けられる楽しさを強く感じました。初めての環境で準備や心構えの難しさもありましたが、学生同士で支え合いながら乗り越えられたことで自分たちの成長を実感できました。今後も積極的に学外へ活動を広げていきたい。（2年生）



図2 音楽サークル①



図4 当日のみその商店街



図3 音楽サークル②

## (2)有頂ヶ丘学園のフェスにおける出演

- ① 日時：2025年10月19日（日）
- ② 会場：和歌山市有功ヶ丘学園
- ③ 出演：音楽サークル（3年4名、2年2名、1年1名）  
ダンス「vegetable zipper」（4年8名、3年2名）

毎年、施設教育実習で学生がお世話になっている有頂ヶ丘学園で「和歌山県福祉事業団 60周年記念事業 ともフェス in 紀北祭り」の一環として実施された。当日は、本学音楽サークルが4つのバンドを編成し演奏を披露した。また、ダンス「vegetable zipper」がダンスパフォーマンスを披露した。出演後に施設の子どもたちを対象に、簡単なダンスと一緒に体験する交流の場が設けられた。



図1 フェスのチラシ

### 【学生のコメント】

屋内とは異なる環境での演奏で少し緊張もあったが、選曲やタイムテーブルにも工夫を凝らし、自分たちができる最高のステージにするために練習を重ねました。多くのお客様に来ていただき、一体感のあるライブが実現できました。この経験を通して、学内にとどまらず学外でのイベントへ積極的に参加し、地域との交流や演奏スキルの向上に努めていきたい。（音楽サークルリーダー3年生）

素敵なイベントで踊らせていただきありがとうございました。私はリーダーとしてメンバーを集めてダンスチームをつかってイベントに参加しました。初心者がほとんどでしたが、何度も練習を重ねて本番では楽しく踊ることができました。最後に施設の子どもたちへのダンス教室も行わせていただき、一緒に体を動かすことができたこともとても嬉しかったです。施設の子どもたちが楽しそうに踊る姿を見て、実習でお世話になった方々に少し恩返しができるようでした。学外での出演は、私にとって忘れられない大切な思い出になりました。

（「vegetable zipper」リーダー4年生）



図2 音楽サークル①



図3 音楽サークル②



図4 ダンス



図5 出演者集合

## 6. 第42回 生協まつり

### (1)概要

日時：2025年10月5日（日）10：00～15：00

場所：和歌山城砂の丸・西の丸広場

参加人数：約135名

学生メンバー：3年生5名 2年生2名



図1 チラシ

### (2)活動内容

本イベントでは、子どもたちが遊びを通して魚に親しみ、魚を食べることへの関心を高めることを目的に「さかなつり体験」を実施した。まず、まぐろ・たい・さばなど、身近な魚の特徴を絵カードで紹介し、「どんな形?」「どこに住んでいるの?」など子どもの気づきを引き出した。その後、磁石付きの釣り竿を使ったさかなつりゲームを行い、子どもたちは狙った魚を釣り上げる喜びを味わいながら、自然と魚の種類や名前を覚えていった。

釣り上げた魚は、学生と一緒に「赤い魚は鯛だね」「この魚は骨がしっかりしているよ」など話しながら観察を行った。この体験を通して、子どもたちは魚への親しみを深め、「魚を食べてみたい」という気持ちを育むことを目的とした。

当日はあいにくの雨で午前中みのブース開催となったが、135名の方に「さかなつり」を楽しんでいただいた。さかなつりを体験した後は、参加賞として小魚をプレゼントした。



写真1 イベントの様子

## 7. バレーボールサークル活動報告書

顧問：飯田まなみ

### 1. バレーボールサークルについて

はじめに、本学バレーボールサークルは、2021年に創設され、2025年4月には一年生から四年生まで約60名が所属し、週1回活動を行っている。活動内容は、週1回みんなで汗を流しながら練習し、サークル内で大会を開いている。大会では、本学の体育館だけでなく、和歌山市内の体育館を借り、「全員が楽しめる・輝ける大会に」と学生が試行錯誤し、企画・運営している。

2025年度より、地域貢献活動（ボランティア）に積極的に参加しており、その活動をまとめる。



写真1 日々の練習の様子



写真2 春の大会（県立体育館）



写真3 夏の大会（市立体育館）

### 2. 地域スポーツクラブ「TO BE GOLDENS」での地域貢献活動

#### (1) 経緯と内容

2024年11月、和歌山市の地域スポーツクラブ「TO BE GOLDENS」のコーチである上田様よりバレーボールサークル顧問として飯田が相談を受けた。「TO BE GOLDENS」は小学校1年～6年までの児童約40人が所属しており、ドッジボールを中心に活動している。活動を継続していく中で、ドッジボールだけではなく「様々なスポーツを児童に体験させてあげたい」と上田コーチから相談いただいた。相談内容から、上田コーチと顧問飯田、バレーボールサークルリーダーで検討した結果、2025年より、まずはバレーボールを活動に取り入れ指導補助等の地域貢献活動を行うことになった。

実際の活動内容としては、ドッジボール・バレーボール共にコーチを補助する役割を担いながら、時には児童と共にドッジボール・バレーボールを行い、対戦相手になることやルールと一緒に学ぶ場面もあった。さらに、2025年10月からは、テニス・バスケも取り入れ、児童だけでなく学生自身も学ぶ場面が多くなったと考える。

#### (2) 活動日程

表1 活動日程

回数	日程	場所	内容	参加人数
1	2月9日 日 17:00~20:00	楠見小	ドッジ・バレー	4
2	2月16日 日 17:00~20:00	楠見小	ドッジ・バレー	3
3	2月18日 火 20:00~21:00	藤戸台小	ドッジ	4
4	3月11日 火 18:00~20:30	信愛大学	ドッジ・バレー	6
5	3月18日 火 18:00~20:30	信愛大学	ドッジ・バレー	8
6	3月25日 火 18:00~20:30	信愛大学	ドッジ・バレー	5
7	4月20日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	3
8	4月27日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	3
9	5月2日 金 18:30~19:30	藤戸台小	ドッジ	5
10	5月11日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	2
11	5月25日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	4
12	6月6日 金 18:30~19:30	藤戸台小	ドッジ	4
13	6月15日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	4
14	6月20日 金 18:30~19:30	藤戸台小	ドッジ	3
15	6月22日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	5
16	6月27日 金 18:30~19:30	藤戸台小	ドッジ	2
17	6月29日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	3
18	7月4日 金 18:30~19:30	藤戸台小	ドッジ	4
19	7月6日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	3
20	7月11日 金 18:30~19:30	藤戸台小	ドッジ	3
21	7月18日 金 18:30~19:30	藤戸台小	ドッジ	4
22	8月3日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	6
23	8月8日 金 18:30~19:30	藤戸台小	ドッジ	4
24	8月10日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	1
25	8月24日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	4
26	9月5日 金 18:30~19:30	藤戸台小	ドッジ	3
27	9月14日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	1
28	9月26日 金 18:30~19:30	藤戸台小	ドッジ	2
29	9月28日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	2
30	10月3日 金 18:20~19:50	藤戸台小	ドッジ・バスケ	3
31	10月10日 金 18:20~19:50	藤戸台小	ドッジ・テニス	2
32	10月26日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	2
33	11月2日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	1
34	11月14日 金 18:20~19:50	藤戸台小	バスケ・テニス	1
35	11月16日 日 17:00~19:00	楠見小	ドッジ・バレー	2
36	12月5日 金 18:20~19:50	藤戸台小	バスケ・テニス	1
37	12月26日 金 18:20~19:50	藤戸台小	ドッジ・バスケ	1
				<b>118</b>

(3) 「TO BE GOLDENS」の地域貢献活動に複数回参加した学生の感想

表2 学生の感想

<p>①参加してみて感じたこと（子どものこと）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・身体を動かすことはもちろん、目標に向かってがんばる子どもの姿や、異年齢の子どもたちと交流する良い機会となっていると感じた。</li> <li>・小学校の低学年は元気いっぱいたくさん話しかけてくれるけど、高学年は自分から話しかけにいかないとあまり心を開いてくれない子もあり、対応に少し戸惑った。</li> <li>・1年生から6年生の男子女子全員ドッジボールも他の競技に対しても意欲的で、体を動かすことが本当に大好きなんだと感じました。友達という時間では笑顔に自由時間を過ごしていたり、練習時間になると真剣な眼差しになって取り組んでいたりと、スポーツが好きの人が一度は通る最初の時期を私は今見ることができ、「指導者、支援する側に立っている」と改めて感じることができました。</li> <li>・子どもたちは「やってみよう」という好奇心が強くあり、ドッジボールだけでなくバレーボールや他の球技にも興味を持ち、自分なりに試行錯誤している姿を感じました。また、学年がバラバラなこともあり、上の学年の子が下の学年の子の面倒をみたり、下の学年の子がボールに触れていないと感じた時は、その子にボールが回るように行動したりアドバイスなどを行っている姿を見ました。スポーツを楽しむことはもちろん、自分だけでなく他の仲間のことも考える力や自分で考えて行動する力も身につくのだと感じました。</li> </ul>
<p>②参加してみて感じたこと（保護者のこと）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・応援している保護者もいて、保護者同士の交流や自分の子ども、子どもの友達と関わることができる機会であると感じた。</li> <li>・保護者と一回同じチームでドッジボールをしてくれた時にたくさんお褒めのお言葉をいただき、教師になる活力をとった。</li> <li>・様々な練習に子どもたちのサポートに入り、時には熱心に指導していました。そんな風景をみて、指導者（教育者）と保護者は常に連携・協力しながら子どもを支えていく関係であるべきだと感じました。</li> <li>・子どもたちの様子を見守るだけでなく、保護者の方も子どもたちと一緒にスポーツを楽しんでいて、みんなで同じ楽しさを味わっているのだと感じました。また練習だけでなく、保護者の方も一緒にミニゲームをしたり、指導やアドバイスをしている姿を見て、チームとして保護者の方が協力的であるからこそ、チームも活気が出ると思いました。</li> </ul>
<p>③参加してみて感じたこと（指導者のこと）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大人数をまとめるのは難しそうと感じた。しかし、低学年・中学年・高学年それぞれの年齢の子どもたちが参加する中で、それぞれの年齢に応じて対応していると感じた。</li> <li>・参加者が自分だけの時、不安でしたが、指導者さんが優しい口調で話しかけてくれて、その後の運動がとても楽しくなった。指導者は子どものことをよくみていて、少しでも異変があれば話しかけに行っていたので、毎回よく観察しているのだと感じた。</li> <li>・一人一人の子どもの能力を把握し練習メニューを作っていて、今後の子どもの成長を見据えた教育課程を組んでいるように感じました。ただスポーツができるって言うことを目標にするのではなく、礼儀であったり、気持ちであったりと、これから先大切になってくる人間性を育てられるように指導されているようにも感じました。</li> <li>・子どもの好奇心やワクワク感を引き出すために、「次は〇〇をしてみよう」という声かけをしてから、子どもたちの想像力ややる気に合わせて活動の内容や進め方を臨機応変に対応していくことの難しさを感じました。学年がバラバラなこともあって、説明の仕方や伝え方に工夫が必要で、指導の仕方言葉だけでなく、身振りを使って視覚的に分かりやすくしていました。子どもたちも言葉だけで説明してもらうより、視覚的に見て理解できる方が、自分なりに考えたり真似をしたりできると感じました。指導者の方は、子どもたちの動きを否定することはなく、その子なりの頑張りやできている部分を見つけてしっかりと伝えていました。また伝える時に名前を読んだから伝えていたので、子どもたちも「自分が褒められている」と分かり、それが次へのやる気に繋がると感じました。</li> </ul>
<p>④ボランティアを通して、自身の成長を感じ点はどのようなことか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもへの運動能力の理解度</li> <li>・教育者になると、体育の授業も行わなければならないため、指導者がどのような指導をされているか見ることが出来、子ども達の発達具合などを知ることが出来た。</li> <li>・スポーツを通しての子どもに関わり方を学ぶことにもつながった。また、自分から子どもに話しかけに行ったのは成長であると思う。</li> <li>・教える、サポートするということはスポーツでも教育でもほかの場面でも、誰かを助けたり、笑顔にさせたりするということとても新鮮で豊かな感情になれると感じました。そこで私は、誰かを笑顔にするためのサポートは誰にでもでき、そこまでの行動力が出るかどうかということを知りました。私はこの行動力を違う誰かにも伝えられたらいいなと考えています。</li> <li>・このボランティアで1番得たことは、新しいことに参加してみようという気持ちです。私自身、自分でこれしたいという気持ちが薄く、これまでは「みんながするなら」という気持ちであったが、このボランティアで「自分で参加したい」というきっかけ作りになったと思います。また、「これしてみたい」という気持ちを自分自身で大切にできたり、新しい場所に踏み出そうというプラスな気持ちも得ました。スポーツという自分も好きなことを通して、子どもたちと関わることの楽しさや指導の仕方、工夫などを身につけられたと思います。</li> </ul>

(4) 「TO BE GOLDENS」に参加している児童の保護者様より

表3 保護者のご意見

<p>①大学生が参加することへの期待</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者が足りず、保護者だけでは頼りない部分も多かったので。</li> <li>・楽しくできると思った。</li> <li>・技術的なサポートをしてくれる。</li> <li>・子どものやる気に繋がるから。</li> <li>・活動の際に子どもに前向きな言葉をかけてくれる。</li> <li>・大人相手だと緊張する子にとって、お兄さんお姉さんとは親しみを持って接する事ができ、また多くの方と関わる機会となり学びを深める事が出来る。</li> <li>・若い人達の元気で本気で相手してもらった時の緊張感が楽しみでした。</li> <li>・現役のバレーサークル学生に刺激をもらえる。</li> <li>・学生も子どもたちも、体感してプラスになれることがあると思った。</li> </ul>
<p>②お子様にとって大学生が参加したことで良いことはあったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・帰ってきたら「～先生と～した」等、会話が増えた。</li> <li>・子ども達と楽しく会話して活動してくれて、毎回子ども達も楽しみに参加しています。</li> <li>・教えてくださる人が増えるとすぐ質問でき、教えてもらえるのでいいと思います。</li> <li>・お兄さんお姉さんに一緒に活動してもらえて嬉しそうでした。</li> <li>・人手が多くて安心感がある。</li> <li>・バレーボールで手本を見せてくれる。</li> <li>・様々な人と交流する事ができる。</li> <li>・優しく指導してくれるので楽しく活動できた。</li> <li>・大学生の方々の挨拶が丁寧で、子どもや保護者皆さんに笑顔で対応されるところが素敵です。親が教えるより、見て学ぶとても良い場面になっており感謝しています。</li> <li>・ドッジボールの時、キャッチボール相手がいない時は相手をしてくれたり、子どもに合わせて寄り添ってくれたり、感謝しています。</li> <li>・楽しそうに教えてもらえる。</li> <li>・楽しそうに参加している。</li> <li>・親しみやすく楽しく学べている。</li> </ul>
<p>③保護者の皆様にとって大学生が参加したことで良いことはあったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学生が仲良くしてくれて、子どもが楽しそうに活動している姿を見ることができてよかった。</li> <li>・子どもに声をかけてくれて、子どもが楽しそうに喋っているのを見ると、安心感がある。</li> <li>・子どもが楽しそうに行く様になりました。大学生の方と色んなお話が出来て、本当に楽しそうです。</li> <li>・子ども vs 大人でのドッジボールが楽しくなった。</li> <li>・投げ方等指導してもらえる。</li> <li>・保護者が参加しなくても運営が回るようになった。</li> <li>・バレーボールのネットが正しく設置出来るので有り難いです。</li> <li>・スムーズに活動できる</li> <li>・たくさん、お手伝いしてくれて嬉しいです。</li> <li>・子どもが楽しそう。準備、片付けなど助かる。</li> <li>・賑やか！</li> </ul>

(5) 「TO BE GOLDENS」コーチ上田様より

バレーボールサークルのみなさん、いつも活動に参加していただきありがとうございます。

子どもたちに競技のサポートをするだけでなく、積極的にコミュニケーションを取ってくれる姿がとても素敵だなと感じています。そのおかげで子どもたちはスポーツを楽しむだけでなく、「自分の話を聞いてもらうこと」、「優しくしてもらうこと」、「困った時に助けてもらうこと」など、人と関わることの温かさや楽しさも経験することができています。私が想定していた以上に、学生のみなさんが関わってくれることの効果の大きさを実感しています。私自身も学生のみなさんが来てくれる事でとても助かっています。本当に感謝しています。学生生活で忙しいとは思いますが、これからも子どもたちに少しでも関わってもらえると嬉しいです。



写真4 ドッジボールの練習



写真5 ドッジボールの試合



写真6 ドッジボールの試合



写真7 バレーボールの様子



写真8 バasketボールの様子



写真9 ソフトテニスの様子

### 3. 「おのみなと・じょうほく・ほんまち」3地区合同キンボール大会 地域貢献活動

#### (1) 経緯と内容

2025年10月、3地区合同キンボール大会主催される方より、「おのみなと・じょうほく・ほんまち」3地区合同キンボール大会の開催にあたり、学生ボランティアの相談をいただき参加した。

内容は、11月16日(日)午前中に、10名ほどの児童が集まり開催された。インフルエンザ流行のため、人数がかなり減ってしまったが、子どもから大人まで全員でキンボールを楽しむことができた。



写真10 キンボールの様子



写真11 集合写真

#### (2) キンボール大会の地域貢献活動に参加した学生の感想

今回キンボールボランティアに参加させていただきました。キンボールは3チーム戦という珍しいスポーツであり、一度しか経験していなかったので、緊張していたが、他のボランティアの方々が、優しく接してくれたので緊張せず取り組むことができました。子どもが学級閉鎖などであまりきていなかったのですが、その代わり一人一人としっかり関わることができたと思います。大きいボールを夢中で追いかけて、初めてやる子どもも多い中、試合をすることができたのは、丁寧なルール説明と子どもでもできるルールの改定だと思います。これらを見習い、いろいろな子どもが楽しめるように行動できるようになりたいと思いました。機会があればまたやってみたいと思います。

#### 4. 「日本製鉄堺ブレイザーズ」ホームゲーム ボランティア

##### (1) 経緯と内容

日本製鉄堺ブレイザーズは、大阪府堺市に本拠地を置く男子プロバレーボールクラブチームであり、2025-26 シーズンは SV.LEAGUE MEN に所属している。今回、11月22日(土)、11月23日(日)に和歌山ビックホエールで開催されるホームゲームに学生スタッフとして参加できないかと相談があった。各日学生が5名ずつ参加することになった。当日のボランティア内容は、屋外での「バレーボールをしてみよう」ブースの運営を行った。子どもから大人まで体験できるブースであったため、教育学部の学生にとっては学びも多いボランティアであった。



写真12 体験サポートの様子



写真13 体験サポートの様子



写真14 11/22 集合写真



写真15 体験サポートの様子



写真16 体験サポートの様子



写真17 11/23 集合写真

##### (2) 「日本製鉄堺ブレイザーズ」ホームゲームボランティアに参加した学生の感想

表4 学生の感想

- ・私は11月23日の日本製鉄堺ブレイザーズホームゲームのボランティアに参加しました。私は体験コーナーのブース運営補助を担当し、沢山の方とバレーボールを通じて関わることができた。バレーボールの試合を見に来たお客さんや、バレーボールチームの子どもたち、近くを通りかかった大人の方など沢山の方にバレーボールを直で触ってもらい、サーブを体験してもらうことで、もっとバレーボールに興味を持って貰えると感じました。サーブ体験の声掛けをしたところ、恥ずかしくて出来ないというお客さんも多く、私自身どのようにしたら楽しくバレーボールに触れ合えるのかと考えました。このブースは、サーブ体験という名の、「バレーボールに興味を持って欲しい」「バレーボールに触れてみてほしい」という気持ちがあると感じたので、不安そうなお客さんには安心できるような声掛けをしたり、的との距離を短くしたり、小さなお子さんなら投げて届く距離まで誘導したりするなどといった工夫を自分たちで考え実践した。バレーボールを通して、幅広い年齢の方とお話をしたり、サーブ体験をしたり、バレーボールを楽しむことが出来て嬉しかった。また、初めてバレーボール選手の試合を間近で見ることができ、迫力が凄く自分もバレーボールの練習をもっと頑張ろうと思いました。
- ・バレーボールの試合を見に行ったことは何度もありますが、裏方として参加するのは初めてでした。多くのボランティアの方が、「選手が一番良い状態でプレーできるように」「お客さんが喜んでくれるように」「売り上げが上がるように」と連携しながら取り組むことの大切さを感じました。また、屋外ブースの運営ボランティアとして活動し、老若男女が参加しやすい雰囲気作りなど教育学部の私たちだからこそのコミュニケーション力を発揮できたのではないかと思います。
- ・屋外のブースだったため、試合を観に来た多くの方が立ち寄ってくださり、幅広い年齢の方にバレーボールの楽しさを伝えることができたと感じました。また、実際に試合を観戦することもでき、迫力あるプレーを間近で見ることができて本当に貴重な経験になりました。
- ・ボランティアで人と関わるのも楽しかったのですが、試合の迫力と空気がすさまじく、選手を間近で見ることができ、自身のバレーボールへの思いが倍増しました。

## 【北山村と和歌山信愛大学との包括連携協定締結】

2025年6月13日(金)、北山村と和歌山信愛大学は、地域社会の発展と学術の振興に貢献することを目的に、包括連携協定を締結した。

これまで本学では、学生と教職員が一体となり、和歌山県内における家庭と地域社会、保育所・幼稚園・認定こども園といった横の連携、また保育所・幼稚園と小学校の教育を繋げる縦の連携等により、子育て・子育ちを総合的に支援できる取り組みに力を入れてきた。また、北山村では『子どもは地域の宝』を合言葉に様々な子育て支援・教育支援事業が実施された。今般、多様化するニーズに合わせた保育・教育環境の充実や専門職の確保をはじめとした、子どもに関わる課題やニーズに対応していくことが重要となる中で、相互の資源を活用した連携の強化を図り、地域社会の発展、学術の振興、人材育成等を一層推進していくため、協定を締結した。

北山村と和歌山信愛大学は、次の事項について連携・協力を図るものとする。

- (1) 学校教育・幼児教育に関すること
- (2) 人材育成に関すること
- (3) 教育・保育環境に関すること
- (4) 子育て支援に関すること
- (5) その他目的を達成するために必要と認める事項



写真 北山村と和歌山信愛大学との協定調印式の様子

## 北山村と和歌山信愛大学との包括的連携に関する協定書

北山村と和歌山信愛大学は、包括的な連携のもと、相互の発展に資するため、次のとおり連携協定を締結する。

(目的)

第1条 本協定は、北山村と和歌山信愛大学が連携のもと、学校教育や幼児教育の向上に向けて相互に協力し、村における教育の充実、大学における教育・研究の充実・発展に寄与することを目的とする。

(連携の内容等)

第2条 北山村と和歌山信愛大学は次の事項について連携・協力を図るものとする。

- (1) 学校教育・幼児教育に関すること
- (2) 人材育成に関すること
- (3) 教育・保育環境に関すること
- (4) 子育て支援に関すること
- (5) その他目的を達成するために必要と認める事項

(守秘義務)

第3条 北山村と和歌山信愛大学は、この協定に基づく活動において、相手方より知り得た秘密事項について、この協定の有効期間中及び終了後を問わず、第三者に対し開示または漏洩してはならない。ただし、事前に相手方の承諾を得た場合は、この限りではない。

(有効期間)

第4条 この協定書の有効期間は、協定の締結日から令和12年3月31日までとする。ただし、この協定書の有効期間満了の日の30日前までに、北山村と和歌山信愛大学のいずれからも改廃の申し入れがない場合は、さらに1年間延長するものとし、その後も同様とする。

(その他)

第5条 この協定に定めるもののほか、必要な事項については、北山村と和歌山信愛大学が協議して別に定めるものとする。

この協定の締結を証するため、本書2通を作成し、署名のうえ、それぞれ1通を保有するものとする。

令和7年6月13日

北山村  
村長

泉 清久

和歌山信愛大学  
学長

森田登志子

図 北山村と和歌山信愛大学との包括的連携に関する協定書

# 1. 北山村・和歌山信愛大学包括連携協定記念交流会 報告

## (1)はじめに

今回、北山村と和歌山信愛大学との包括連携に関する協定の締結を記念し、2泊3日の交流会が開かれた。和歌山信愛大学の学生と教員、そして長期社会体験研修教員で、北山村へ訪問した。最初に、北山村の概要を説明いただき北山村の現状や魅力を知ることができた。また、北山村の有名な筏下りも体験させていただき、大自然を肌で感じるとともに、船頭の方に北山村の豊かな自然のことや魅力をお話いただき、貴重な時間を過ごすことができた。

また、参加学生で準備した「ミニ子どもフェスタ in 北山村」と、大橋教授による講演会、テーマ「表現を通して知ることのほんとう」を開催し、地域交流の機会を頂いた北山村の保育所や小学校・中学校の見学をさせていただき、少しの時間ではあったが子どもたちと交流することができた。

最終日には、4年生3名は北山村の保育所での半日保育体験、1年生は北山村の保育所・小学校・中学校の見学をさせていただいた。概要は以下である。

日時：2025年9月2日（火）

～9月4日（木）

場所：和歌山県北山村

参加人数：和歌山信愛大学

1年21名、4年3名

教員2名

長期社会体験研修教員1名

計27名

## (2)北山村の概要

北山村を訪れて最初に北山村の教育委員会の方から村について学んだ。北山村は、和歌山県でありながら三重と奈良に囲まれ和歌山県に接していない全国唯一の飛び地の村であり、和歌山県最後の村である。人口は383人である。飛び地の由来として諸説はあるが、明治4年廃藩置県の際に本来は奈良県に入るべきところを、木材で繋がり深かった新宮が和歌山県となったことから、北山地域も是非和歌山県にとの希望が受け入れられ飛び地として和歌山県に入ったと言われている。



図1 子どもフェスタ in 北山村 チラ



写真1 北山村へ出発 信愛大学にて



写真2 北山村



写真3 北山村観光協会前で



写真4 筏下りに出発



写真5 筏下りの体験

### (3)ミニこどもフェスタ・講演会

2日目の9月3日にミニこどもフェスタと大橋先生の講演会を開催した(写真6~写真12)。

「ミニこどもフェスタ」では、北山村の子ども(未入所3名、保育所11名、小学生16名)と保護者・大人(10名)、計40名参加があった。大橋先生の講演会では、保育士2名、小学校教職員8名、中学校教職員6名、保護者10名、地域の方6名、教育委員会事務局5名、計37名参加があり、講演会中は本学4年生が子どもたちを預かり、保護者がゆっくり安心して講演会に参加できるようにした。



写真6 大橋教授による講演会の様子

#### (1)ミニフェスタ活動内容

##### ①全員でのダンス

「からだ ダンダン」「エビカニクス」

「ジャンボリミッキー」の3曲を踊った。代表で2、3人ずつ前に出て踊った。

##### ②年齢別の遊び(保育所の4、5歳児・小学生)

「素材で遊ぼう～紙コップってなんだろう」を開催し、紙コップを使って遊びを展開していった。

##### ③年齢別の遊び(保育所の2、3歳児・未入所児)

絵本読み聞かせ、感覚遊びブース(ボールプール、手作りおもちゃ)を自由に遊べるようにした。

## (2)子どもたちの様子

- ①全員でのダンスでは、最初は戸惑いを見せる子どももいたが、学生の働きかけにより、全員が元気に楽しく踊る様子があった（写真7）。
- ②「素材で遊ぼう！」の時間では、紙コップだけの素材で遊ぶ時間にした。すると、私たちが想定していた以上の発想が生まれ、紙コップで家のように囲いを作る子どももいた（写真8）。その後の紙コップを使った発展遊びとして、紙コップレース、紙コップ釣り、紙コップ文字合わせ、紙コップジェンガ、紙コップ輪入れを用意した。子どもたちは好きな遊びを選択し、生き生きと楽しむ様子があった（写真9）。
- ③低年齢児用の遊びとして手作りおもちゃを学生が作り用意していた。その中で、発達に合わせた遊びをする様子が見られた（写真10）。一番人気であったのがボールプールでどの年齢の子どももボールを投げる、ボールの中に埋められるとそれぞれの遊び方をして楽しんでいた（写真12）。また、絵本の読み聞かせでは、1年生と4年生が1人ずつ、「だるまさんが」と「おべんとうバス」を読んだ。子どもたちは一緒に参加しながら絵本を楽しむ姿があり、子どもたちを惹きつける読み方で読むことの大切さを感じることができた。



写真7 ダンスの様子



写真8 紙コップで家づくりの様子



写真9 紙コップ入れ



写真10 手作りおもちゃ



写真11 みんなで相撲



写真12 ボールプールに熱中

#### (4)半日保育・学校見学

最終日は、1年生は保育所・小学校・中学校の見学、4年生はきたやま保育所で半日保育を行った。1年生は、和歌山市内にはない複式学級での授業を見学し、「先生」としてどのように子どもたちとかがかかわっているのかを学んだ（写真13）。

4年生は、半日保育を通して、就職するにあたって保育の課題点や子どもの様子に沿った保育をすることの大切さ、子ども主体の保育ができるような指導計画の立て方を学ぶことができた（写真14）。



写真13 小学校での交流



写真14 半日保育

#### (5)最後に

初めて北山村に行き、たくさんのいい事を学ぶことができた。子どもたちが元気いっぱい何事にも前向きであった。こどもミニフェスタでは、全員が全力で遊んでいる姿を見て、子どもが楽しいと感じる遊びを展開することの大切さを学ぶことができた。4年生3人にとって、最後のこのような機会、1年生をまとめつつ1からイベントを作っていくことの難しさを感じつつも、フレッシュな新しい考え方から、子どもが楽しいと感じる遊びの案を学んでいくことができた。1年生も北山村へいくための準備をしているうちにどんどん頼もしくなっていき、当日は子どもたちの笑顔を引き出す教育者の顔になっていた。1年生にとっても、4年生にとっても成長した交流会であった。

最後になりましたが、このような貴重な機会をくださった北山村の皆様ありがとうございました。

(総括リーダーK・M)

### 〈令和7年度長期社会体験研修教員の感想〉

教員の長期社会体験研修の一環として、北山村和歌山信愛大学包括連携協定記念交流会に参加させていただきました。参加学生の多くは1年生で、学外で初めて子どもと関わる活動だったようで、最初は緊張している様子でした。しかし、ミニフェスタにおいて、子どもたちと関わる中で次第に笑顔を見せ、心を通わせる様子が見られました。恥ずかしがっていた学生が積極的にダンスを披露したり、自ら子どもに声をかけたりする姿を見て、心があたたまりました。

また、4年生3名が司会や連絡係を務め、リーダーシップを発揮している姿は、現場で求められる力が着実に身につけていることを感じられ、非常に頼もしく思いました。

多くの学生にとって北山村は初めて訪れる場所だったようですが、子どもとの交流を通じて地域とつながり、地域の魅力を体感することができていました。この経験は、将来現場で働く際に「地域を大切にする視点」を持って取り組む姿勢につながると思いました。

さらに、北山村保育所で行われた4年生の実習では、ミニフェスタで使用した紙コップや新聞紙を活用し、子どもたちが自ら活動を展開する様子が見られました。先生の指示がなくとも、子どもたちが主体的に素材に働きかけ、工夫を重ねる姿からは、児童の「主体的な学び」を実現するための大きな示唆を得ることができました。

今回の交流会で得た学びを、今後の学校現場における実践に生かしていきたいと考えます。貴重な体験の機会をいただき、心より感謝申し上げます。

(令和7年度長期社会体験研修 教員 M・S 氏)

### 〈自治体からの感想〉

この度は連携協定の締結および記念交流事業の実施、誠にありがとうございました。交流事業の実施に当たっては、普段和歌山市を拠点とする学生の皆さんに、過疎地域・山間部の教育・保育の現状を実感していただくとともに、北山村の子どもたちや保育・教育にかかわる方にも学びの機会となるよう計画させていただきました。

普段と違い年齢の近いお兄さん、お姉さんと交流できたことは小さな村で過ごす子どもたちにとって貴重な経験となったことと思います。少ない人数のためにたくさん準備していただき、子どもたちの楽しそうな様子に、開催してよかったという思いを関係者一同がもっています。

また、なかなか一堂にそろって研修の機会を持ちにくい教職員にとっても、皆で同じ話を聞き、今の教育・保育について考える機会を得られたことは、今後の北山村にとって大きな一歩になったように感じています。

森下先生・大橋先生・準備の中心を担ってくれた4回生の皆さんをはじめ、多くの方の協力により実現した交流会でした。あらためて御礼申し上げますとともに、今後とも、こうした機会を持ち続けていけるよう、何卒よろしく願いいたします。

(北山村教育委員会 小林賢司 氏)

## 【有田川町教育委員会と和歌山信愛大学との包括連携協定締結】

2026年2月3日(火)、有田川町教育委員会と和歌山信愛大学は、地域社会の発展と学術の振興に貢献することを目的に、包括連携協定を締結した。本学は、2023年に始まった「有田川町教育最先端化1000日プロジェクト保育力向上研修」の取り組みをはじめ、有田川町の地域の保育・教育の充実や、学生と町民の交流促進を進めるため様々な活動を協働実施している状況である。有田川町は、保育・教育従事者の待遇改善や、町内のこども園等で保育体験や交流を行う等、保育士・幼稚園教諭への関心を高め、職業自体の魅力を伝える取り組みを進めている。本締結式には、有田川町教育委員会より教育長の片嶋氏と、こども教育課指導主事の小切氏が来学し、今回の連携協定を契機として、より一層、学生と地域の方の交流を通じた双方の学びの機会の充実に努め、保育・教育の充実に貢献することが話し合われた。

有田川町教育委員会と和歌山信愛大学は、次の事項について連携・協力を図るものとする。

- (1) 学校教育・幼児教育に関すること
- (2) 人材育成に関すること
- (3) 教育・保育環境に関すること
- (4) 子育て支援に関すること
- (5) その他目的を達成するために必要と認める事項



写真 有田川町教育委員会と和歌山信愛大学との協定調印式の様子

## 有田川町教育委員会と和歌山信愛大学との包括的連携に関する協定書

有田川町教育委員会と和歌山信愛大学は、包括的な連携のもと、相互の発展に資するため、次のとおり連携協定を締結する。

### （目的）

第1条 本協定は、有田川町教育委員会と和歌山信愛大学が連携のもと、学校教育や幼児教育の向上に向けて相互に協力し、町における教育の充実、大学における教育・研究の充実・発展に寄与することを目的とする。

### （連携の内容等）

第2条 有田川町教育委員会と和歌山信愛大学は次の事項について連携・協力を図るものとする。

- （1） 学校教育・幼児教育に関すること
- （2） 人材育成に関すること
- （3） 教育・保育環境に関すること
- （4） 子育て支援に関すること
- （5） その他目的を達成するために必要と認める事項

### （守秘義務）

第3条 有田川町教育委員会と和歌山信愛大学は、この協定に基づく活動において、相手方より知り得た秘密事項について、この協定の有効期間中及び終了後を問わず、第三者に対し開示または漏洩してはならない。ただし、事前に相手方の承諾を得た場合は、この限りではない。

### （有効期間）

第4条 この協定書の有効期間は、協定の締結日から令和12年3月31日までとする。ただし、この協定書の有効期間満了の日の30日前までに、有田川町教育委員会と和歌山信愛大学のいずれからも改題の申し入れがない場合は、さらに1年間延長するものとし、その後も同様とする。

### （その他）

第5条 この協定に定めるもののほか、必要な事項については、有田川町教育委員会と和歌山信愛大学が協議して別に定めるものとする。

この協定の締結を証するため、本書2通を作成し、署名のうえ、それぞれ1通を保有するものとする。

令和8年2月3日

有田川町教育委員会  
教育長



和歌山信愛大学  
学長



図 有田川町教育委員会と和歌山信愛大学との包括的連携に関する協定書

## 【新宮市と和歌山信愛大学との包括連携協定締結】

2026年2月5日(木)、新宮市と和歌山信愛大学は、地域社会の発展と学術の振興に貢献することを目的に、包括連携協定を締結した。新宮市と本学は、2024年度より「子育て支援講座」「保育力向上研修会」「学校現場における授業改善」、2025年度には「おでかけ！和歌山信愛大学（出張講座）」の開催等、様々な取り組みを行っている。本締結式には、新宮市より上田市長と、子育て推進課課長の中口氏らが来学し、今回の協定の締結を機に、新宮市と本学との連携を一層強化し、地域交流や実践的な学びの機会をさらに充実化させることや、2026年度からの保育人材確保に向けた新たな取り組みについて等の意見交換を行った。

新宮市と和歌山信愛大学は、次の事項について連携・協力を図るものとする。

- (1) キャリア教育・幼児教育に関すること
- (2) 人材育成に関すること
- (3) 幼児教育・保育に関すること
- (4) 子育て支援に関すること
- (5) その他目的を達成するために必要と認める事項



写真 新宮市と和歌山信愛大学との協定調印式の様子

## 新宮市と和歌山信愛大学との包括的連携に関する協定書

新宮市と和歌山信愛大学は、包括的な連携のもと、相互の発展に資するため、次のとおり連携協定を締結する。

(目的)

第1条 本協定は、新宮市と和歌山信愛大学が連携のもと、幼児教育・保育の向上に向けて相互に協力し、市における教育の充実、大学における教育・研究の充実・発展に寄与することを目的とする。

(連携の内容等)

第2条 新宮市と和歌山信愛大学は次の事項について連携・協力を図るものとする。

- (1) キャリア教育・幼児教育に関すること
- (2) 人材育成に関すること
- (3) 幼児教育・保育に関すること
- (4) 子育て支援に関すること
- (5) その他目的を達成するために必要と認める事項

(守秘義務)

第3条 新宮市と和歌山信愛大学は、この協定に基づく活動において、相手方より知り得た秘密事項について、この協定の有効期間中及び終了後を問わず、第三者に対し開示または漏洩してはならない。ただし、事前に相手方の承諾を得た場合は、この限りではない。

(有効期間)

第4条 この協定書の有効期間は、協定の締結日から令和12年3月31日までとする。ただし、この協定書の有効期間満了の日の30日前までに、新宮市と和歌山信愛大学のいずれからも改廃の申し入れがない場合は、さらに1年間延長するものとし、その後も同様とする。

(その他)

第5条 この協定に定めるもののほか、必要な事項については、新宮市と和歌山信愛大学が協議して別に定めるものとする。

この協定の締結を証するため、本書2通を作成し、署名のうえ、それぞれ1通を保有するものとする。

令和8年2月5日

新宮市  
市長

上田 勝之

和歌山信愛大学  
学長

森田 隆志子

図 新宮市と和歌山信愛大学との包括的連携に関する協定書

## 【自主活動】

### 1. 「チューリップ 150 球」を咲かせようプロジェクト

〈概要〉

開始日：2025 年 12 月～

場所：和歌山信愛大学 3 号館前花壇

〈報告〉

一昨年度からの「チューリップ 100 球」を咲かせようプロジェクトに引き続き、今年度も 2025 年 12 月 10 日（水）に、本学の 3 号館前花壇とプランターに、本町こども園の年中・年長児合計 21 名と信愛大学生有志 13 名、センター委員 5 名と一緒にチューリップの球根 150 球を植えた。

本町こども園の園児の皆さんは、植えた後も、お散歩の途中などに水やりをして、花が咲くのを楽しみにしてくださっている。



写真 球根植えの様子 本町こども園の年中・年長児の皆さんと共に

## 2. 「ひまわり」を咲かせようプロジェクト

〈概要〉

開始日：2025年6月～

場所：和歌山信愛大学3号館前

〈報告〉

「ひまわり」を咲かせようプロジェクト第2弾を行った。

2025年6月10日（火）に、本学の3号館前に昨年度と同様、本町こども園の年長児25名と信愛大学生有志10名と一緒にひまわりの種を蒔いた。

今回プランターに植えた種は、今年の「ひまわり」を咲かせようプロジェクトで育てたひまわりから採れたもので、今年も本町こども園の園児の皆さんが、お散歩の合間に水やりに来てくださり、ひまわりは元気に成長した。

ひまわりの種の命のリレーと同じように、本学も地域の皆さんとの温かい交流を末永く続けていきたい。

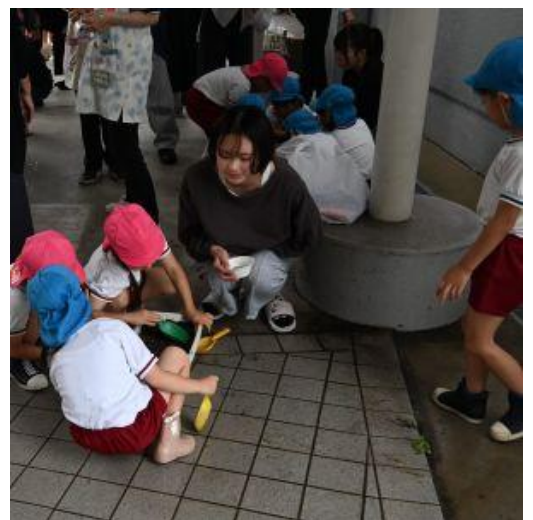


写真1 種蒔きの様子 本町こども園の年長児の皆さんと共に



写真2 立派に成長するひまわり



写真3 来年に向けて 種の収穫

## 【子育て支援への支援活動（すくのび応援隊）】

### 1. 2025年度のスくのび応援隊 目指す主な活動

- (1)現場スタッフ交流会 年3回程度
  - ・グループワーク ・事例検討会 ・子育て支援の在り方等の検討
- (2)子育て支援ネットワークすくのびメンバーと学生との交流
- (3)支援者への個別支援とスーパーバイズ
- (4)研究蓄積

### 2. 2025年度のスくのび応援隊 活動報告

#### (1)すくのび応援隊 打合せ・交流会

##### ①すくのび応援隊 第4回交流会

日時：2025年5月16日(金)10:00～12:00

場所：和歌山信愛大学 保育実習室

参加者：すくのび応援隊12名と教員2名 計14名

##### ②すくのび応援隊 第5回交流会

日時：2025年9月26日(金)10:00～12:00

場所：和歌山信愛大学 保育実習室

出席：すくのび応援隊9名と教員1名 計10名



写真1 交流会の様子

#### 〈参加者からの感想〉

各拠点施設の悩みや支援員さんとの交流をもつことによって、いろいろ悩みを抱えた利用者さんに対してどう対応したらいいのか思う事も多々あり、皆さんの意見がすごく勉強になります。自分自身の成長にもつながります。

これからも支援員の資質の向上とともに会が発展していくことを願います。

(和歌山市地域子育て支援拠点施設 わかば♪ 五十川順子 氏)

すくのび応援隊の活動を通して、親子に寄り添う支援の大切さを改めて感じました。交流会では、それぞれの立場から見た課題や取り組みを共有し合い、互いに励ます時間となりました。また、親子との関わり方を見つめ直す機会となり、支援する人が支え合うことの大切さを改めて感じました。

交流会を通して、自分自身の関わり方を振り返る機会にもなり、今後の活動に活かしていきたいと思いました。親子に寄り添いながら、より良い支援を続けていけるよう努めていきたいです。

(和歌山市地域子育て支援拠点施設 育ちのえき くすの木 谷智哉子 氏)

(2)「和歌山信愛大学こどもフェスタ IN 本町 2025」での「出張ひろば (子育て広場)」共同活動

日時：2025年7月12日(土)13:00~15:00

場所：和歌山信愛大学 保育実習室 (【和歌山信愛大学こどもフェスタ】参照)

(3)すくのび応援隊研修会

〈概要〉

日時：2025年8月29日(金)10:30~12:00

場所：和歌山信愛大学 音楽室

講師：越野章史 氏 (和歌山大学教育学部)

参加人数：41名

〈参加者からの感想〉

2024年12月、「和歌山県子どもの権利に関する条例制定を求めると」が、一部有志によって立ち上げられた。「子どもの権利条約」に基づいて、すべての子どもの権利を保障し尊重するまちづくりを目指し、

条例制定に向けて活動が進められている。日々の支援の現場において「親や保護者の精神的安定」と「子どもの安心の育ち」、その両方をどう保障していけるのかは大きな課題の一つと感じている。なので「子どもの権利条例制定を求めると」の中心メンバーである、和歌山大学越野章史先生の講演会を開催したいという『子育て支援ネットワークすくのび』の思いを受け止めていただき、信愛大学の『すくのび応援隊』で企画して下さることになったことは、本当にありがたかった。

日本は・過度に競争的すぎることで、結果子どもたちの不登校やいじめ、自死など様々な問題を引き起こす要因となっているとして、「国連子どもの権利委員会」から再三にわたり是正勧告を受けていること・教員の中にも「子どもの権利条約」を知らない人もいること・子どもの自死の原因の多くが、「いじめ」と思い込んでいるが、実は学業不振や進路への悩みが上位を占めているということ・子どもの、『遊ぶ、休む権利』『自由に自分の意見を言う権利』など保障するためであるはずの『子どもの権利条約』が、うまく機能していないのはどこに原因があるのか等々、いろいろなデータを使って分かりやすく話して下さった。そんな状況の中で私たち大人の責任として、子どもの権利をこれからどう守っていけるのか…。少し暗澹たる気持ちにもなったけれど、越野先生は、「子どもが、『自分には、一人の人としての人権がある』ということを知る、つまり人権思想をきちんと学ぶことで、他の人にも人権があると気が付く。」というお話は、とても大事で当たり前のことのようにだけれど、常に意識しておかないと大人都合で簡単に抜け落ちてしまうとも感じた。

レジュメの最後に、「この状況を好転させるのに近道はない。子どもを中心に、その声を聴き取りながら、大人のしんどさも含めて語り合い、学び合い、少しずつ問題意識を共有していくしか…」と



図1 チラシ

締めくくられていた。ここは本当に大事なところで、希望につながる言葉だと私は感じた。私たち子育て支援の現場でこそ丁寧に実践していかなければと思わせてもらった。

そもそも、親たち自身が子ども時代を、人権を大事にしてもらえないまま大人になった人が少なくないと感じている。そんな親たちと共に、「子どもの権利」について、同時に「親であるあなたたち自身の権利」について、どう共有し理解を進めていけるのか、拠点の果たす役割は大きいと思う。そのためにも、私たちスタッフが、学びを深め希望を持って活動を進めていきたいと強く感じさせてもらった。

この機会を作っていただいて、本当にありがとうございました。

(きのくに子ども NPO ほっとルームぐるんぱ 佐藤百子 氏)

講演を聞いて、日本の子どもたちの現状について深く考えさせられました。ユニセフの調査で、日本の子どもたちは身体的な幸福度が高い一方で心の幸福度がとても低いという話が印象に残り、勉強や学校のことで苦しみ、自分を責めてしまう子どもが多いという現実に胸が痛みました。

日本には「子どもの権利条約」という、子どもを守る為の大切な約束がある事を知り、子ども自身にも、そして親御さんにも、その存在を伝えていくことが大切だと感じました。くすの木は、未就園児が親子で安心して過ごせる場所です。私は、子どもたちにも保護者の方にも「ここにいれば大丈夫」と思ってもらえるような、あたたかい居場所づくりをしていきたいです。そして、子どもが自分らしく笑顔でいられる社会を、一緒に育てていきたいと思います。

(和歌山市地域子育て支援拠点施設 育ちのえき くすの木 藤原洋子 氏)

15歳から40歳近くまでの死因の原因が自殺する方が多くを占めていて、自ら命を断つことへの辛さや悲しみを感じました。また、15歳以下の子ども達は、持病が多いと思っていましたが、ほぼ自殺の件数と変わらない状態にあり小さい子がなぜ自殺をしないといけないのかということにすごく疑問を感じました。また、学校に通う子どもでいじめの自殺者が多いと思っていましたが、実際にはそうではなく学業不振という結果を聞いて、自分がしっかりと成績を残せないという考えや高い目標を持っている子などができないと思い、追い詰められていることが原因であることにとても悲しく感じました。現在、不登校の増加傾向の原因の一つはコロナ禍が関係しているのかもしれないが、勉強がしんどくて精神的に負担を抱えている子どもが多くいるのかなと改めて思いました。

今回の内容は、私自身子育て中であるため、これから小学生になる我が子とすごく重なり、親身に向き合っていく必要があるのだとすごく勉強になりました。現状が少しでも良い方向に変わってほしいなと思いました。

(和歌山市地域子育て支援拠点施設『ワーカルらんど』 山口茉美 氏)

今回の研修ではショックを受けることが多かったです。日本の若者の死因が病気や事故ではなく自殺者が多いことに驚きました。こんなにも恵まれているのに…と、今の自分が幸せな環境にいるのだということを感じました。さらに不登校の原因の一番がいじめではなく、試験や進路など将来の不安が多いということも知りました。報道で大きく取り上げられていることだけを鵜呑みにするのも怖いことだと思いました。どうすれば子どもたちが幸せだと感じ、人間らしく生きていけるのかをゆっくり考えることができ、良い時間を過ごすことができました。

(和歌山市地域子育て支援拠点施設『ワーカルらんど』 門友美 氏)



写真2 研修会の様子



## 【学生地域ボランティアサークル活動支援】

〈和歌山信愛大学子育て支援キャラバン隊〉

### 1. 子ども食堂よみきかせ

#### (1)概要

日時：2025年8月9日(土) 第1部 16:30～

第2部 17:15～

第3部 18:00～

場所：和歌山市中央コミュニティセンター ぼけっと子ども食堂

スタッフ：学生6名（3年生4名、1年生2名）



図1 案内板

#### (2)報告

和歌山市中央コミュニティセンターのぼけっと子ども食堂で学生によるよみきかせ（絵本：『ねこはるすばん』・『みどりのトカゲ』・『ほしのおうじさま』・『ひみつのたからもの』・『フライパンダ』・『パンドロぼう』・『どうぞのいす』・『おばけのてんぷら』・『めがねうさぎ』、『なつのおとずれ』）（大型絵本：『ふねくんのたび』）（紙芝居：『むし、はっけん！』）を行った。導入には学生手作りのボードシアターを活用した。

絵本の表紙を見せて「どんな話が始まるかな」と問いかけ、子どもの予想を聞いてから読み始め、ページをめくる際は絵がよく見えるように角度を調整し場面に応じて声の強弱や間の取り方を意識するなど試行錯誤しながら子どもたちと向き合った。

#### (3)子どもの反応

最初は緊張した様子で静かに聞いていたが、物語が進むにつれて表情がほぐれ、絵を指したり登場人物の気持ちを想像してつぶやいたり積極的に物語と関わろうとする姿が見られた。よみきかせを通して、子どもたちが言葉だけではなく「イラスト」や「間」を通して物語を受け取っていることを改めて感じ、読み手側の声の強弱や間の取り方の大切さを実感した。

#### (4)学生レポート

##### ①学生メンバー

3年生4名、1年生2名

##### ②活動内容と担当した学生の感想

###### 【学生の感想】

- ・実際に子どもたちを前にして絵本を読むという貴重な体験をすることができました。会場の雰囲気も温かく、子どもたちや保護者の方々も表情豊かによみきかせを聞いてくださり、楽しい時間を過ごせました。時に印象的だったのは子どもたちとゲームで遊ぶ体験で、難しいルールของเกมでも続けていくうちに楽しさや工夫点を見出すほか、新しくアレンジしたルールを作って友達同士で共有するといった子どもたちの姿を見ることができ、私自身視野が広がったように感じました。
- ・子どもたちはそれぞれの本に興味を持ち、様々な反応を示してくれて面白いと思いました。絵本を

読み終わり、子どもたちや保護者の方が拍手してくれたとはとても嬉しく感じ、様々な年齢の子どもたちと関わることができました。

- ・初めてよみきかせをしたのでとても緊張しました。子どもとの関わり方や絵本の選び方を学びました。声の大きさや絵本の見せ方を工夫できるようにしたいと思いました。年齢の違う子が一緒に遊んだり、お父さんお母さんも真剣にゲームをしたり、普段接する機会がない人とも交流できるところが子ども食堂の良さだと思いました。
- ・初めて子ども食堂でのボランティアに参加し不安もありましたが、子どもたちが積極的に話しかけてくれたり、おとなしい子も話すとたくさん話してくれて、とても楽しい時間を過ごすことができました。声の大きさや読み方の工夫を勉強しながら今後活かしていきたいと思いました。
- ・子どもたちが静かに耳に傾けてくれる姿にやりがいを感じました。終了後には声の大きさや絵本の持ち方についてアドバイスをいただき、自分の改善点を知る良い機会となりました。

### 【よみきかせ】



図2 よみきかせの様子

## 2. 和信祭よみきかせ

### (1)概要

日時：2025年11月29日(土)、30日(日) 11:00～11:30

場所：和歌山信愛大学3号館 保育実習室

スタッフ：学生6名(3年生4名、1年生2名)

### (2)報告

本学の大学祭において学生による手遊びやよみきかせ(絵本：『ひみつのたからもの』・『クリスマスったらクリスマス』・『100にんのサンタクロース』・『ともだちや』)(大型絵本：『ぜったいにあけちゃダメ?』)を行った。2日間で40名を超える地域の方や親子の来場があった。子どもたちが絵本の世界に自然と引き込まれていく様子を見ることができた。繰り返しのフレーズに反応して笑ったり、箱の中身を予想したりと、

参加しながら楽しむ姿が印象的だった。よみきかせを通して、子どもたちが物語を自分たちなりに感じ取り、友達同士で感想を言い合う様子も見られ、絵本がコミュニケーションのきっかけになることを改めて実感した。



図1 チラシ



図2 手遊び、よみきかせの様子

## 〈わかまなび〉

### 1. 「わかまなびを知ろう」地域の方、OB、OG、在学生の交流会

#### (1)概要

日時：2025年3月15日（土）、16日（日）

場所：かつらぎ町立天野地域交流センター簡易宿泊所「ゆずり葉」

主催：わかまなびサークル

参加人数：天野地域の小・中学生9人

学生メンバー：1年生（現在2年生）4名

#### (2)活動内容

##### （1日目）

- ・地域散策 天野地域の観光地をOBの案内でめぐる
- ・天野の子どもたちと交流 体育館でオリエンテーション後しっぽとりやドッジボールで遊ぶ
- ・夜ごはんづくり 天野の子どもたちと一緒にカレーライス、サラダを作る
- ・星と月についての講演会 佐藤先生によるプロジェクターで星と惑星について楽しく学ぶ

##### （2日目）

- ・谷口さんを偲ぶ会を開催し、故人を追悼した
- ・「社会教育サークルわかまなび」への想いと活動の記録について  
OB、OGによる「社会教育サークルわかまなび」の設立経緯や活動内容についての説明。具路さんによる「えびとおはぎ」の活動内容の説明
- ・振り返り 参加者同士で感想を共有し、桜の木に見立てた紙に思いを書いた。

#### (3)参加した学生の感想

- ・天野の自然に触れ、子ども達や環境の良さを知ることができました。そして、過疎地域にもかかわらず地域のみんなで天野の良さを感じることができました。子どもたちと一緒に遊び、料理をすることができたことも良い思い出になりました。
- ・「わかまなび」としてこの天野地域に来ることができて良かったと思いました。天野地域の子どもたちと交流をして、学年問わずみんなで仲が良く、明るく優しさを持っていると感じました。ここへ遊びに来たいと思いました。
- ・みんなでカレーを作ったり遊んだり経験したことのないことができてとても良かったです。子どもたちみんな仲が良く楽しかったので、このような活動をもっと広めていきたいと思いました。
- ・普段できない経験をすることができ、とても良かったです。地域の方々や子どもたちに会っていろいろなお話や遊ぶことができ良い学びとなりました。このサークルでしかできないことがたくさんあるのでこれからも参加していきたいと思いました。



写真1 地域散策



写真2 交流活動



写真3 夕食づくり

## 2. 天野育成会 クリスマス会に参加

### (1)メンバー

学生：3年2名

### (2)実施内容

日時：2025年12月21日（日）13：00～17：00

場所：かつらぎ町立天野地域交流センター簡易宿泊所「ゆずり葉」

天野育成会によるクリスマス会に参加しました。

幼児から高校生と幅広い年齢層の天野の子どもたちや、保護者の方々と、共に時間を過ごしました。みんなで楽しく会話しながら、葉の製作やポスター制作をしました。また、プレゼント交換やゲームにも参加させていただき、楽しい時間を過ごしました。学生2名は、クリスマス会で、手あそびと絵本の読み聞かせをさせていただきました。

わかまなびの1期生OGや和歌山大学大学院の方も参加されており、先輩の話も聞くことができました。人とつながる温かさやぬくもりを感じることができた素敵な時間でした。



図1 クリスマス会の様子



図2 絵本の読み聞かせ



図3 製作と交流

### 【学生の感想】

今回参加して、地域の人々が集い、世代を超えて交流する場の大切さを強く感じました。一方で、こうした行事がなければ人と人が関わる機会が少なくなっている現状を思うと、地域とのつながりが希薄化していることは寂しく、悲しいことだと感じました。

栗づくりやゲームなどの活動を通して、子どもたちが自然に笑顔になり、保護者や地域の方々との間にも会話が生まれていた様子から、交流の場があることで人の輪が広がることを実感しました。だからこそ、このような地域行事は、失われつつあるつながりを取り戻す大切な役割を果たしていると感じました。

今回の参加を通して、地域との関わりを大切に、交流の場を継続していくことの重要性を改めて考えるきっかけとなりました。

### 【主催者からの感想】

今回、クリスマス会の参加人数が多く、また、文化祭に向けての製作活動が主な内容となってしまったので、なかなか子ども達との交流は難しかったかなと思いますが、一緒に製作活動やプレゼント交換に参加していただき子ども達も楽しんでくれたようです。

他の地域からお兄さん、お姉さんが来てくれる事は子ども達も刺激となり人との交流を通じて社会性を学ぶ事ができるいい機会だと考えます。

今後は子ども達だけではなく、子ども会リーダーの中学、高校、大学生とも交流できればお互いに刺激や学ぶ事も多いと思います。

(天野育成会 佐藤亮 氏)



## 2. 事業（動画撮影）報告

### (1)事業説明

月 日：2025年6月3日(火)

場 所：和歌山信愛大学 中講義室1

内 容：県社協による動画制作事業の趣旨と実施方法の説明を聞き、その後、事業を進めるために必要なアンケートに取組

### (2)魅力発掘研究会 1

月 日：2025年6月24日(火)

場 所：和歌山信愛大学 保育実習室

参加者：学生10名

内 容：動画制作事業に応募した5園のPR動画と提出書類を確認し、その内容を基に、各園の特色と追加で確認したい点をグループワークで整理



写真1 ワークショップの様子

### (3)魅力発掘研究会 2

月 日：2025年7月29日(火)

場 所：和歌山信愛大学 保育実習室

参加者：学生9名

内 容：魅力発掘研究会1で整理した各園の特色、5園への質問回答、学生が事業説明時に取り組んだアンケート内容を基に、各園の魅力や特色を分析

### (4)各園との打ち合わせ

月 日：2025年8月22日(金)・25日(月)・26日(火)・27日(水)・9月18日(木):オンライン(Zoom)

参加者：各園の職員 数名・学生各2名

内 容：各園の職員と自己紹介を行うとともに、撮影に向けて双方が事前に確認したい事項を話し合い、撮影に向けた事前打合せを実施

(5)動画撮影、インタビュー実施

月 日：2025年9月22日(月)・25(火)・26(水)・10月14日(火)・20日(月)

場 所：各撮影園

参加者：撮影園(職員・園児)多人数・学生各2名

内 容：各園の職員にインタビューを行い、必要なカットの撮影に参加  
(同日に業者による園の撮影も実施)



写真2 動画撮影風景の様子

(6)情報交換会

月 日：2025年10月27日(月)

場 所：和歌山信愛大学 保育実習室

参加者：学生8名

内 容：動画撮影を振り返り、現場で得た声や自身の  
気づきをまとめて共有

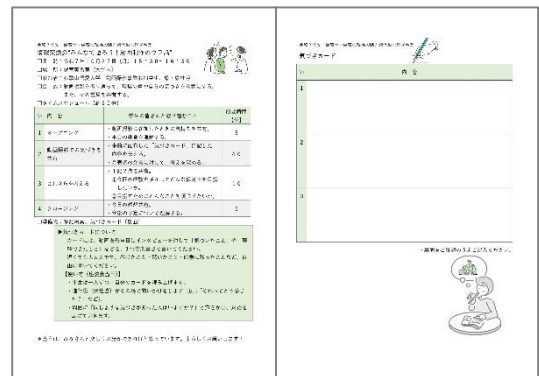


図3 情報交換会ワークシート

(7)学生出演カット撮影およびナレーション収録

月 日：2025年12月1日(月)

場 所：和歌山信愛大学 保育実習室

参加者：学生9名

内 容：業者による撮影において出演カットの撮影と、動画内で使用するナレーション収録に参加

(8)動画内容の確認

月 日：2026年2月2日(月) 予定

場 所：和歌山信愛大学

内 容：各園の動画内容を確認

(9)動画完成：2026年2月末 予定

〈参加した学生の感想〉

保育の魅力発信事業に参加し、動画撮影やナレーションを担当させていただいたことで保育の魅力を伝える側として関わる貴重な経験ができ、学生がこうした活動に参加することに意味があると感じました。それぞれの園に雰囲気や大切にしている考え方を知り、それぞれの園に違った魅力があることを実感しました。今回の経験を通して、保育は大変な仕事であると同時に、人の成長に関われるやりがいのある仕事であることを再認識しました。今後は、自分自身も保育の魅力を伝えられる存在になりたいと考えています。

保育士・保育の現場の魅力発信事業での取り組みを通して、実際に保育園を訪問し、実習ではなかなか聞くことのできない保育士のプライベートの過ごし方や、職員同士が良好な関係を築くための工夫などについて知ることができました。また、学生同士でそれぞれが訪れた園について共有する中で、園ごとに保育方針や環境、行事などに特色があり、同じ保育園や幼稚園でも様々な在り方があることを学びました。保育士という仕事を心の底から楽しみ、子どもたちと丁寧に向き合いながら働く保育士の姿を見て、やりがいや人とのつながりの大切さなど、保育士という仕事の多くの魅力を知る貴重な経験をすることができました。

私は保育の魅力発信事業を通して、保育の魅力を全国に発言するだけでなく自分自身も保育の新たな魅力に気付くことができました。現在、保育者をされている方に直接お話を聞かせて頂く機会もあり、保育者を目指す私にとって興味深いお話ばかりでした。サッカーや旅行に行ったお話など、仕事と趣味を両立しながら楽しく保育をされている保育者の方のお話を聞いて、私自身も「保育者になりたい」という思いが一層強くなりました。撮影後には、学生で話を共有する時間を設けて頂き、園ごとの個性を感じるとともに私自身がどんな園で仕事をしてみたいか考えるきっかけにもなりました。インタビューや撮影、ナレーションなど慣れないことばかりでしたが、大学生の今だからこそできる良い経験になったと感じます。出来上がった動画を見て、保育について興味を持って下さる方が少しでも増えればいいなと思います。

実際に園にお伺いして、現場で働かれている先生方からお話を聞くと、想像していたよりも更に働きやすい環境づくりが工夫されていることを知りました。これまでは書類作成などの事務作業が大変であるというイメージを持っていましたが、園では AI を導入することで業務の効率化を図り、職員が働きやすい環境づくりに取り組んでいることがわかりました。またクレドを導入することで、職員一人ひとりが共通の意識を持って保育に取り組んでいる姿勢が印象的でした。保育の魅力を伝えることを目的としていましたが、私自身も現場の生の声を聞き、知らなかった保育の魅力を感じる事ができ、良い学びの機会となりました。

私は、この事業に参加するまでは保育士の仕事は自分自身の時間を作ることが難しく、大変な仕事というイメージを持っていました。しかし、インタビューの際に先生方が、「仕事が楽しい！」と思う瞬間について、日々の保育の中でのエピソードとともに嬉しそうにたくさん話していたり、子どもたちと関わる様子から、互いに笑顔が溢れている姿が見られたりし、大変なことだけでなく、それ以上にやりがいのある、魅力が詰まった仕事であることを強く感じる事ができました。また、私がお話を伺った保育園では、若手職員や子育て中の職員等に対し、主任保育士が日頃から職員の様子に配慮

したり、業務の調整を行ったりするなどの対応をしており、自分の趣味や自分の時間も大事にできるようにしていると知り、子どもたちを大切にするとともに、職員も大切にする姿勢が非常に印象的でした。今回の経験から、私も子どもたちと信頼関係を築き、子どもが安心して伸び伸びと活動しながら過ごせる環境を整えられるような先生になりたいと思いました。また、子どもの成長を支えられるような保育を心がけ、保護者と共に子どもの成長を喜び合える関わりも大切にしていきたいと考えています。

現場で働いている保育者の方や園長先生、また保育者の中でも経験年数や立場の異なる先生方のお話を直接聞くことができ、とても貴重な機会だったと感じました。それぞれの立場からのリアルな声を聞くことで、これまで漠然と抱いていた将来への不安が少し和らいだように思います。実際の現場でのやりがいや大変さ、乗り越えてきた経験などを知ることで、保育の仕事の魅力をより具体的にイメージすることができました。今回のような取り組みが、保育の道に進むか迷っている人や、潜在保育士の方にも届き、保育の魅力を知るきっかけになればよいと感じました。

#### 〈自治体等からの感想〉

事業実施2年目となる今年度は、昨年度の経験を踏まえ、学生さんが各園の特色や取組を知りながら保育現場のリアルに触れられる機会となるよう心がけました。5園での撮影では、学生さんが今抱えている不安や疑問を保育士さんに直接尋ねることで、多くの気づきや学びが得られたと思います。どの園でも保育士さんは「毎日、楽しいんです!」と話され、その姿から日々の保育を心から楽しんでいることが伝わってきました。その言葉に触れた学生さんは、保育現場で働く未来をより前向きに思い描けるようになったのではないのでしょうか。また今年度は新たに学生さん同士の情報交換会も実施し、撮影で得た気づきを共有することで考えを整理する時間にもなりました。

この事業に携わった方々が今回の経験を生かし、自分なりの「保育士」を楽しんでほしいと思っています。最後に、今回制作した動画も多くの人にとって保育現場のことを想うきっかけとなれば嬉しいです。

(社会福祉法人和歌山県社会福祉協議会 嘱託 西浦由樹子 氏)

令和6年度から、和歌山県こども未来課、和歌山県社会福祉協議会の保育士人材確保事業の一環として、和歌山信愛大学と連携して、保育士・保育の現場の魅力発信事業を開始し、今年度で2年目となりました。本事業は、保育士を目指す学生や、保育現場への再就職を検討する潜在保育士に、県内の保育士や保育現場の魅力ある保育の内容を、「動画」という分かりやすい形で伝える取組です。事業を通じて、学生が抱えている不安や疑問を現場の保育士に直接尋ねることができ、各園の特色や取組、保育の魅力、現場で働く保育士の思いを、学生自身が直接感じ取る機会となりました。また、今年度新たに実施した学生同士の情報交換会では、学生が各園で得た学びを共有し、自分のなりたい保育士像や将来の就職について改めて考える良い機会になったと捉えています。

完成した動画については、昨年度に引き続き、和歌山県の保育に関するポータルサイト「わかやま保育のひろば」等に掲載し、今後も活用しながら、和歌山県の保育の魅力発信につなげていきたいと思っています。

(和歌山県こども未来課 副主査 西村ひかる 氏)

### Ⅲ. 正課授業の取り組み

#### 1. 1年生必修科目「ボランティア実習」

##### 1. 概要

本学では、社会に貢献する態度を身につけ、コミュニケーション力を養うこと等を目的として1年生対象の必修科目として、「ボランティア実習」を開講している。2025年度は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえて、細心の注意を払いながら実施した。

##### 2. 学内授業

1	4月17日（木）1限	授業概要説明
2	5月29日（木）1限	ご講義・ボランティア紹介 ・和歌山市地域フロンティアセンター市民公益活動登録説明制度のご説明 ・公益財団法人 島財団 のボランティア募集 ・サントスプリッツ和歌山支部 ・和歌山市立子ども支援センター「ふれあい教室」について
3	6月12日（木）1限	ご講義・ボランティア紹介 ・和歌山県社会福祉協議会 ・和歌山市社会福祉協議会 ・海南市社会福祉協議会
4	7月3日（木）1限	各種ボランティア紹介、夏休み中の活動に関する諸注意
5	10月7日（火）1限	中間振り返り
6	12月9日（火）1限	事後振り返り（グループワーク、発表会準備）
7	1月14日（火）1限	事後振り返り（体験発表会）

表1 授業内容

今年度は、学内授業 14 時間、学外実習 16 時間の配分で行った。新型コロナウイルス感染症に注意をし、体調管理を徹底しながら通年でボランティア活動に参加することができた。

なお、学内授業にご協力いただいた講師の皆様・関係者の皆様、そして学生たちへボランティア活動の機会を提供して下さった皆さまには、厚くお礼申し上げたい。



図1 ボランティア募集等の説明



図2 成果発表会

■ ボランティアでお世話になった組織団体

和歌山市子ども支援センター、湊小学校、和歌山県青少年協会こども体験支援事業、保護猫カフェはっぴーわんだふる、和歌山市スポーツ振興課、海南市社会福祉協議会、NPO 法人ワンダフル二度目の命、アルテリーヴォ、島精機、宮小学校、こばと学園、子どもセンターるーも、日本赤十字社 童夢ポケット、本町交通安全母の会、児童養護施設 ゲストハウス RICo、ソラティオーラ和歌山、社会福祉法人つわぶき会、しょうぶこども園、なないろキッチン、本町こども園、松江幼稚園、北山村、放課後等デイサービス・発達支援、西中組、和歌山市、ソラティオーラ和歌山、おかん食堂、一般社団和歌山県視覚障害者協会、かんどりこども園、一般社団法人サンタスプリッツ

## 2. 1年生選択科目「地域連携フィールド学習」

### 1. 概要

本科目は、地域の文化や特性を理解し、また地域の魅力を再発見するとともに、少子高齢化等に伴う地域の課題を解決する熱意を育むこと、また多様な世代と良好な関係を築くコミュニケーション力を育成することを狙いとしている。本年度は10名の学生が受講した。新型コロナウイルス感染症が、2023年5月に5類感染症に移行したことより、初年度2019年に実施して以来、中断していたが、感染症対策に配慮しつつ、2025年9月2日～4日の2泊3日の宿泊体験型で現地フィールド学習を行うことができた。コーディネートいただいた日高川町企画政策課を始めとする、日高川町の関係の皆様には厚くお礼申し上げたい。

### 2. 現地フィールド学習の概要

(1)2025年9月2日

9:30 大学出発

10:30 日高川町到着

防災センター見学

12:00 昼食

14:00 椿山ダム見学、町の観光施設～ヤッホーポイント等～

18:00 宿泊

<学習内容>

・日高川町防災センターでは、「日高川町の防災対策と取り組みについて」をテーマに、同町がこれまで経験してきた災害の歴史と防災施策についてご講義をいただいた。その後、館内の各種展示を見学し、体験型の学習プログラムに参加した。

見学では、消火器操作を模したゲーム、水害時にドアへかかる水圧を再現した体験装置など、身体を動かしながら学べる内容が多く含まれていた。特に、浸水時に水圧を受けたドアを押し開ける体験では、浸水後の避難行動がいかに困難であるかを実感することができ、防災への理解をより深める貴重な機会となった。



図1 防災講義



図2 備蓄倉庫見学

・椿山ダムは、和歌山県と奈良県の県境に位置する護摩壇山を水源とし、御坊市を経て紀伊水道へ注ぐ日高川に建設された多目的ダムである。洪水調節、かんがい用水の補給、発電を主な目的としており、年間降雨量の多い日高川流域においては、例年1～3回の洪水調節を実施し、出水被害の未然防止に寄与している。

当日は、事業者である和歌山県より講義を受けたのち、ダム内部の施設を見学した。外気温が高い中で、ダム下部の内部空間は非常に冷涼であり、その温度差が印象深いものであった。



図3 椿山ダムでの講義



図4 椿山ダム見学

・ヤッホーポイントでは、日本一の山彦を体験するため、ポイントに立ち、大声を出したり、歌を歌って輪唱にしたりと楽しみながら、自然地形の魅力を学んだ。

(2)2025年9月3日

9:30～ 複式学級についてのお話と授業見学（中津小学校）

11:30～13:00 給食とレクリエーション交流（休憩時間）

14:00～15:30 新高津尾発電所見学

16:00 きのくに中津荘着 川釣り体験

17:00 防災食づくり※BBQ、飯盒など

<学習内容>

・日高川町では、人口減少が続き、小・中学校の統廃合が進んでいる。今回は、中津小学校にお世話になり、複式学級における授業見学と、学生自ら何度も企画を考え準備した企画で、生徒との交流を実施させていただいた。

・授業参観以外にも、給食や遊び時間を、児童と学生で、一緒にさせていただいた。



図5 授業見学



図6 頂いた給食

・新高津尾発電所では、関西電力の方々から、説明を受けながら、発電所内の見学と、ダムの見学をさせていただき水力発電を学んだ。普段は目にする事のない巨大設備を見学し、発電の仕組みと自然との関係を学ぶことができた。



図7 新高津尾発電所



図8 水が通る巨大なパイプ

・防災食づくりについては、「何を、どのような方法で作るか」を学生同士で話し合い、準備を進めた。検討の結果、「お米を炊く」ことを主な活動とし、その方法として飯盒炊爨（すいさん）を実施することに決めた。学生が主体となって必要物品の準備を行い、お米は参加者全員で持ち寄って確保した。

当日は、燃料や火種の調達方法について地元の方々から教えていただきながら、施設周辺で薪となる材料を集めた。集めた木材を組み、火を整えながら飯盒で炊飯を実施した。着火後も、地元の方々から火加減や炊き方について丁寧にご指導いただき、学生は協力しながら炊き上がりを見守った。

炊きあがったご飯は地域の皆さんに「美味しい」と言っていただき、学生にとって大きな励みとなった。今回の取り組みを通じて、災害時の食の確保に向けた準備の重要性に加え、経験者から学び、協働することの大切さを実感する機会となった。

・防災食づくりを体験させていただいた「きのくに中津荘」という施設は、都市住民との交流を進めるための施設として農林漁業体験実習館として1993年に建設されたもので、現在はバーベキュー等もできる宿泊施設として運営されている。私たちも宿泊させていただいた。



図9 火種探し



図10 火起こし

(3)2025年9月4日

<行程表>

午前 農作業体験→出荷まで。

郷土料理体験

13:00 日高川町出発

15:00 和歌山信愛大学着

※豪雨予想で公共交通機関にも影響が出そうであったため、少し早めの帰校をした。

<学習内容>

・農作業体験では、朝から農家である大澤恵様、ケイ子様から、旬のいちじくの出荷を体験させていただきました。ほぼ全員が初めての体験で、「自分が買いたくなるように！」と並べ方等を、教えていただきながら、選果、道の駅 SanPin 中津に出荷手伝いをさせていただきました。買ってくださる方の身になり、綺麗に並べることを学んだ。食べるのも初めての学生も多く、日高川町の地元のものを食べさせていただき体験をした。



図 11 箱詰め作業の説明



図 12 いちじく出荷

・郷土料理体験では、地元のゴーヤを使った炒め物と、まぜご飯を、地元の方に教えていただきながら、学生たちが協力して調理を行った。



図 13 学生たち力作の料理



図 14 郷土料理の講話

### 3. 事前学習・事後学習

フィールド学習においては、訪問先の地域や人物に関する事前学習を行い、背景や課題への理解を深めたうえで現地に向かった。訪問後には、現地での気づきや学びを振り返る事後学習に取り組み、得られた知見を整理した。

これらの学習内容は模造紙にまとめ、10月のオープンキャンパスにて展示発表を実施した。当日は、多くの高校生や保護者、地域住民の方々に向けて、本科目での学びの成果を分かりやすく発信することができた。

### 3. 2年生必修科目「地域力再生論」

#### 1. 授業概要・構成

2年生前期に開講される地域連携科目の一つであり、2025年度の受講人数は70名だった。

和歌山が抱える地域課題について理解を深め、課題解決のための力を身につけることを目指し、地域課題の具体的な事例を行政関係者・地域住民・NPO関係者等との対話やグループごとのインタビュー調査を通して協働的・実践的に学習する方法をとっている。授業の流れは下表の通りである。

表 2025年度「地域力再生論」の授業構成

回数	日程	内容
1	4月10日	オリエンテーション・地域力再生とは
2	4月17日	日本の近代化、災害復興と地域再生の課題のアナロジー
3	4月24日	和歌山市と商店街と大学の関係の説明（Do場）
4	5月1日	①6テーマ説明、②希望調査
5	5月8日	インタビュー内容づくり
6	5月15日	①前回は踏まえてインタビュー内容づくり、②質問状の様式にまとめる
7	5月22日	子ども（食堂）とまちづくり 【ゲスト講師】三岩真紀氏（Team MAK-e Spot 代表）
8	5月29日	和歌山県の現状と取り組むべき課題 【ゲスト講師】中西 茉友氏（和歌山県企画課）
9	6月5日	SDGsと和歌山市における取組 【ゲスト講師】戸田侑輝氏（和歌山市企画政策課）
10	6月12日	未来ある子どもたちにはリサイクルの大切さを知ってもらおう！ 【ゲスト講師】松田美代子氏（株式会社松田商店会長）
11	6月19日	地域資源（フルーツ）を活かした地域活性化の取り組み 【ゲスト講師】西峰祐美氏（一般社団法人紀の川フルーツツーリズム理事）
12	6月26日	地域力再生における市民の役割&わかやまNPOセンターの取り組みについて 【ゲスト講師】志場久起氏（和歌山県NPOサポートセンター・センター長）
13	7月3日	グループごとに報告会（と最終レポート）の準備
14	7月10日	学習体験報告会・まとめ

#### 2. 学習成果

ゲスト講師の皆様には昨年につき、わかりやすく、それぞれの立場から取り組まれている地域の課題や現状等についてお話をいただきました。学生たちは、事前にグループに分かれて各機関・団体の取り組みを学び、実際にゲスト講義の後にインタビューを行うことで、実践的・協働的な学びを経験することができました。ご協力いただいた皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

#### 3. 受講学生の感想

・講義やゲスト講師のスピーチから、和歌山県の現状と課題を知ることができ、地域住民として自覚をより強く持つようになりました。これからは身近なことから地域に貢献していきたいと感じました。

## 4. 2年生必修科目「地域連携フィールドゼミナール」

### 1. 概要（シラバスより転載）

フィールド学習により地域特性への理解を深めながら、内在する地域課題を解決する意欲と課題解決力の向上を図る科目である。担当教員のもと、15～20人程度の少人数グループに分かれて、ゼミ形式で学習を深める。各自治体及び地域団体等と連携して、地域の特性や町の仕組み、抱える課題を調査・探求し、町の整備、活性化や歴史的風致維持向上にむけた計画、提案を考える。

### 2. ゼミ担当教員・テーマ・自治体

宮定章ゼミ「地域とつながる居場所づくりの可能性」@和歌山市

千森督子ゼミ「和歌山県有田郡湯浅町の歴史と教育を活かした活動」@湯浅町

小田真弓ゼミ「大学生による地域連携活動の効果と課題」@大阪府南部、和歌山市

飯田まなみゼミ「和歌山市民の健康・体力づくり」@和歌山市

### 3. 成果報告

次頁から、各ゼミ又は各ゼミの学生が作成した成果報告書を掲載する。大学開学から7年目、本科目の開講から6年目を迎えて、少しずつ実践や研究が深まっている様子を読み取っていただければ幸いである。

## 地域連携フィールドゼミナール（宮定ゼミ）成果報告

### 地域とつながる居場所づくりの可能性

指導教員：宮定章

ゼミ生：16名

#### 1. はじめに

本ゼミの活動範囲は、本町地区およびぶらくり6商店街界隈である。本町地区では、地域の実践者や住民を中心に、子どもが安心して過ごすことができる環境づくりが行われている。今年度は、防災を新たな視点として取り入れ、防災センターでの体験学習を実施した。また、和歌山信愛大学で行われたクリスマス会に参加し、子どもたちと直接関わることで、地域で求められる居場所の役割や子どもとの関わり方について考える機会となった。これらの活動を通し、地域における居場所づくりの必要性和、その実現に向けた課題や可能性について探究した。

#### 2. 目的

本年度の活動では、子どもの体験格差に着目した。体験格差は、家庭環境や地域資源の違いによって、子どもの経験できる活動内容や量に差が生まれる現象である。本ゼミでは、この課題を踏まえすべての子どもが安心して参加でき、多様な経験をえられる居場所とはどのようなものかを明らかにすることを目的とした。

#### 3. 実施内容

##### (1) 共食体験（トルティーヤ作り）

私たちは、ゼミ活動で子ども食堂の意義や内容、実際に参加することで感じられることをつかむためにぶらくり丁に位置するコミュニティスペース『Do 場』にて「子ども食堂体験」を行った。ゼミ生全員でトルティーヤ（写真1・2）を作って食べた後、普段子ども食堂の運営をされている三岩さんにお話を伺った。三岩さんは子ども食堂を運営されているうえでどんなことを意識しているのかをお話ししてくださった。

特に印象に残ったのは、共食を通して地域の人同士をつなぎ合わせていく場を作っているため、知らない人同士が交流できる機会作りや、ぶらくり丁で実施することで子ども食堂に参加するためにぶらくり丁に足を運ぶ人を増やすようにし、子ども食堂を通じて地域の活性化を目指していくことを目指していることだ。また、子ども食堂は経済的困窮の状況下にある子どもたちのみを対象にしたものではなく、性別、年齢、状況を問わない。むしろ、食事の場で困っている子どもを見つけ出すような機会として捉えていると話していた。

メキシコの郷土料理トルティーヤを食べるといふ共食体験を通して、新しい食文化に触れることができた。生地を焼く、具材を包むなど役割分担しながら協力して調理を進める中で、ゼミ生間の交流も深めることができた。自分たちなりにアレンジを施すことによる達成感、食事を共にした仲間への感謝、共食をすることで感じる楽しさなどを肌で感じることもできた。このような体験から共食は食事を仲間同士で行うだけでなく、心を豊かにしてくれる大切な時間であると感じた。

このような体験から共食を子どもが体験することは、前述にあるような体験格差の生じている状況の子どもにとって、貴重な人とのつながりを感じられる機会になると学んだ。また、様々な子どもの

特徴等を予測し、柔軟な活動を構築していることから、今後の教育活動にも様々な子どもの特性に理解をもって寄り添う姿勢を学んだ。



図1 共食体験



図2 トルティーヤの材料

## (2) 居場所づくりのための防災学習

### ①防災体験学習

和歌山市消防局防災学習センターでは、体験的に災害について学べる環境を整えている。そうすることで小学校三年生から始まる社会科の防災についての学びを深める場としての役割を果たしている。その中で私たちは、心臓マッサージの疑似体験や屋内での火災避難体験、消火器を使ったシューティングゲーム、津波や地震の映像を通して災害時に必要な知識と行動の重要性を実感した。

心臓マッサージでは、救命の基本動作を実際に体験することで、緊急時の迅速な対応の大切さを学んだ。屋内での火災避難体験では、視界が悪い状況での避難の難しさを実感し、安全な行動や冷静さの必要性を理解した。消火器を使ったシューティングゲームや津波や地震の映像を通して、災害時の判断力や準備の重要性を身近に感じることができ、知識だけでなく実践的な意識を高めることができた。

また、上記の学習から特に災害時の居場所づくりの備えに大切な視点として以下のことが重要だと展示より考えた。「避難生活に役立つもの」「救急・救出用品」「避難時に役立つもの」「家庭で備えるもの」の4つに分類することができ、下記の表がその具体物となっている。

避難生活に役立つもの	非常食・長期保存水、飲料水袋、組み立て式トイレなど
救急・救出用品	避難はしご、レスキューキット、バール、標識ロープなど
避難時に役立つもの	防災頭巾、ヘルメット、懐中電灯、ホイッスル、災害用リュック、災害用避難シューズなど
家庭で備えるもの	非常食、医療用キット(持病用)、ガラス用シート、突っ張り棒など

表：避難生活で役立つもの（出典：和歌山県和歌山市消防局防災学習センターの防災グッズの展示）

### ②防災食体験

被災した状況での QOL を少しでも高めるためにゼミの皆で「非常食を美味しく食べるために備え

ておくと良い具材・調味料」に焦点をおいて、アルファ化米を美味しく食べるにはどうすればよいかを考え、実際に食べることで組み合わせを探した。

そして私たちのゼミでは「ツナ缶とマヨネーズ」・「一味、ごま油、しょうゆ」・「魚の煮付けの缶詰」の三つが良いという結論となった。また調理法についてもアルファ化米を用いた雑炊なども硬くなりやすいという特性をカバーできるという考えにも至ることができた。

### ③講話体験

次に私たちは地域フロンティアセンターに集まり、災害が起こった時の対処法について学習した。

また、自らの生命を守るための事前準備として、家具の固定や用品の備蓄、避難の安全対策を行うことが大切であると学んだ。さらに、長期的に見た災害時の子どもの心のケアについても学習した。

子どもの心のケアで重要なことは、安心感を与えること、日常を取り戻すことを助けること、被災地の映像を繰り返し見せないこと、子どもは自ら回復する力があることを理解し見守ることの4つである。こうした知識を知っておくことで、有事の際には自分のみならず他の被災者の身の安全を確保することができることを学んだ。



図3 集合写真

### (3)クリスマス会

12月14日に和歌山信愛大学で、Team MAK-e Spot(チームメイクスポット)さん主催の子ども食堂・クリスマス会が開催された。開催場所は、私たちが日頃学んでいる大学であったため、学びの場が地域の子どもの保護者に開かれた空間となる貴重な機会であった(図3)。

当日に向けた準備段階では、ゼミ生で意見を出し合い、企画内容について話し合いを行った。結果、「サンタさんにお願い事を書こう」という企画に決定

した。靴下を型取った画用紙にお願い事を書き、クリスマスツリーに貼っていくことで、会場が華やかになる点や、保護者が子どもの思いを知るきっかけとなる点などが挙げられた。また、来場した子どもが気軽に参加でき、楽しい気持ちで帰ってもらえることを重視した。これらの話し合いを通して、支援活動においては大人の視点ではなく、子どもの立場に立って考える視点が不可欠であること、また小さな配慮の積み重ねが、子どもの主体性や安心感につながることを学んだ。準備では、クリスマスツリーやオーナメントの制作、靴下作りを行った。



図4 書く内容を子どもに説明するゼミ生



図5 完成したツリー

子どもたちは、サンタさんの着ぐるみに会うこと、楽器の生演奏を聴くこと、大人数でケーキを食べることなど、日常生活ではなかなか得られない体験をしていたように思う。今回のクリスマス会を通して、食事を共にすることや、誰かと話すことが、子どもの心を和らげ、安心感を生む支援につながることを肌で感じた。また、支援活動とは特別なことをするのではなく、子どもが「楽しい」「また来たい」と思える時間と空間を用意することが重要であると学んだ。今後は、今回の学びを生かし、体験格差や地域支援について、より主体的に考え、関わっていきたい。

#### 4. ゼミ活動を通して学んだこと

本ゼミの活動を通して学んだことは、大きく分けて2つある。

1つ目は、子どもの体験格差を地域の「居場所」づくりによって補うことの重要性である。子ども食堂体験やクリスマス会への参加を通して、食事を共にすることや地域の人と関わること、非日常的な体験が、子どもに安心感や楽しさをもたらすことを実感した。子ども食堂は、年齢や背景を問わず誰もが集える場であり、体験格差を縮小するための重要な地域資源であると学んだ。また、活動を企画・運営する立場として、子どもの年齢や発達段階を踏まえた配慮が、子どもの主体性や安心感につながることを理解した。

2つ目は、地域における支援活動には、人と人をつなぐ視点と、防災を含めた備えの視点が必要であるということである。防災学習を通して、災害時の行動や知識だけでなく、日頃からの備えや被災後の生活の質、子どもの心のケアまで考えることの大切さを学んだ。防災は日常と切り離されたものではなく、居場所づくりや地域のつながりと深く関わっていることを理解した。

これらの活動から、支援とは特別な取り組みではなく、子どもや地域の人が「安心できる」「また来たい」と感じられる時間と空間を継続的に用意することであると学んだ。今後は、本ゼミで得た学びを生かし、体験格差や防災、地域の居場所づくりについて主体的に関わっていきたい。

#### 5. 今後の課題

本年度のゼミ活動を通して、子ども食堂や防災学習、クリスマス会などの取り組みが、子どもにとって安心できる居場所や貴重な体験の機会となっていることを実感した。一方で、これらの活動はまだ限られた範囲での実施にとどまっており、すべての子どもや地域住民に十分に届いているとは言い難いと思う。そのため今後は、活動を継続的に実施するとともに、情報発信の方法を工夫し、より多くの人に参加しやすい環境を整えていく必要がある。

また、防災学習を通して得た知識や視点を、日常的な居場所づくりにどのように生かしていくかも課題である。災害時に子どもが安心して過ごせる環境を整えるためには、平時から人とのつながりを築き、多世代が関わる場を育てていくことが重要であると感じた。防災を特別な学習として終わらせるのではなく、子ども食堂や地域行事などの活動の中に取り入れ、地域全体で支え合える関係を築いていく必要がある。

今後は、子どもの体験格差という課題を意識しながら、子どもが「また来たい」「ここに居たい」と感じられる居場所とは何かを考え続け、地域や大学の立場を生かした関わり方を模索していきたい。

(謝辞) 本ゼミの活動にあたり、ご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

## 和歌山県有田郡湯浅町の歴史と教育を活かした活動

指導教員：千森督子

ゼミ生：18名

### 1. はじめに

本ゼミはフィールド学習により地域特性への理解を深めながら、内在する地域課題を解決する意欲と課題解決力向上を図る科目である。私たちは「和歌山県有田郡湯浅町」をフィールドに町と連携し、古民家再生や地域の子どもたちの社会教育など、町の整備と活性化を目指した活動を行った。

### 2. 本年度の活動

本年度の活動は、古民家再生と児童の社会教育の大きく二つから成る。以下、実施した活動について詳しく報告する。

#### (1)古民家再生

1)活動目的：古民家再生活動を実体験することにより、歴史を生かした湯浅町の町づくりについて理解し、寄与することを目的とする。

2)実施概要：(年月日) 令和7年10月15日、22日 (場所) 湯浅町湯浅 古民家



写真1 古民家外観



図1 壁塗り対象箇所

3)活動内容：千森ゼミでは、6年前から古民家の再生を早稲田伊織大工さんの指導の下に取り組んでいる（写真1）。外壁の改修と土間づくり、庭づくり、壁張り、一階の床組み、断熱材のはめ込みと床板張り作業を終えていたため、今年度は壁塗り作業を行った（図1）。

#### ①準備

壁塗りの左官作業は本来熟練技術を必要とするために、経験の無い大学生が可能な方法と材料を早稲田大工さんと検討した。その結果、材料は漆喰よりも珪藻土が塗りやすく、道具もコテ、ヘラよりもローラーやスポンジを用いた方が容易に塗装できることを知った。そのために、材料は珪藻土、使用道具はローラーやスポンジを主体とし、漆喰やコテ、ヘラを補助的に用いることにした。

## ②壁塗り作業内容

まず、ローラーを用いてシーラーで下塗りをし、耐久性を高めた。その後、珪藻土を水で練ってから容器に移し、ローラーやスポンジに珪藻土を馴染ませながら、壁の上下、左右方向に塗装した。板壁は珪藻土を二度塗りし、土壁は粘着力の関係から珪藻土を一度塗った後、漆喰をさらに塗装した(写真2~7)。

## ③工夫点

- ・塗りにムラがないように懐中電灯で光を当てながら塗装面を確認して塗ったり(写真6)、一度塗って乾かした後に二度塗りをしたりした。
- ・スポンジを使う際に、スポンジの柔らかい部分と硬い部分を状況に合わせて使い分けた。
- ・隙間がないように端は細いヘラを用いて塗った(写真7)。
- ・土壁部分は、二度塗り時に勢いよく塗ると壁が剥がれてしまうため、優しく塗った。

## ④活動の今後

壁を塗装することにより室内が整った。次年度、隣室境の壁と建具の製作に取り組むことにより、六帖の部屋が完成する予定である。



写真2 板壁にローラーで珪藻土を塗る場面



写真3 土壁にコテで漆喰を塗る場面



写真4 土壁をローラーで塗る場面①



写真5 土壁をローラーで塗る場面②



写真6 懐中電灯で壁を照らす場面



写真7 ヘラを使って端を塗る場面

## (2)児童の社会教育

### ”クリスマスの思い出を作ろう！”

1)活動目的：社会教育活動でも教育委員会主催の「わくわくチャレンジ教室」に参加し、クリスマスを盛り上げるグッズ製作イベントを開催し、学校教育では得られない体験や教育効果を児童に提供する。さらに、児童同士と児童と大学生が相互交流する機会を設ける。

#### 2)実施概要

日時：令和7年11月23日

場所：湯浅えき蔵 3階地域交流センター

対象：小学校1年生～6年生

参加人数：20人

#### 3)活動内容

①児童を会場へ案内、受付で名簿確認、大学生と交流（写真8）

②サンタに扮した大学生(フジサンタ、ワラビサンタ)による司会進行（写真9）

③クリスマスに関係したクイズ大会（写真10）

10問のクリスマスに関係したクイズを出し、○×の札に移動し、正解を確認する。考え、動くことにより大いに盛り上がる。

④クリスマスグッズの製作活動（写真11-14）

4つのブースの説明後に作品を紹介し、児童の興味のあるブースへと誘導し、各ブースで大学生とコミュニケーションを取りながら製作活動を行う。

a.クリスマスリースを作ろう：子ども自身にデザインを考えてもらい、事前に準備した紙製のリースに子どもたちが製作した折り紙や事前準備の飾りを貼り付ける。

【素材準備】クリスマスリース、折り紙、リボン、オーナメント（靴下、ベル）、ペン、綿棒  
ボンド

b.松ぼっくりツリーを作ろう：事前に準備した松ぼっくりに、スパンコールや鈴を飾り付ける。

【素材準備】スパンコール、松ぼっくり、ボンド、鈴、綿棒、紙コップ

c.クリスマスツリーを作ろう：事前に準備した紙製のクリスマスツリーに子どもたちが製作した折り紙等を飾り付け、デザインする。

【素材準備】クリスマスツリー、折り紙、リボン、オーナメント（靴下、帽子、星、ベル  
トナカイ、プレゼントボックス、キャンディー、リース）、ボンド、綿棒

d.毛糸ボールに飾り付けよう：大学生が事前に風船を用いて製作した毛糸ボールに、ミニサンタ帽子や折り紙を飾り付け、子ども自身がデザインを考える。

【素材準備】ミニサンタ帽子とピン、折り紙、ボンド、綿棒

#### 4)写真撮影

完成した作品を持った児童と大学生と一緒に記念写真を撮る（写真15）。

#### 5)記念品プレゼント

信愛大学で用意したマーカーなどの記念品を入れたバッグを一人一人に手渡す。



写真8 会場内受付



写真9 司会のサンタによる挨拶



写真10 クイズ大会



写真11 クリスマスリース製作



写真12 松ぼっくりツリー製作



写真13 毛糸ボール製作



写真14 クリスマスツリー製作



写真15 記念写真

### 3. まとめ

前半は、歴史ある町を維持・継承するための古民家再生活動に取り組んだ。今年度は、民家の壁を塗装する体験をさせていただき、全員で相談・協力して作業に取り組むことができ、民家再生の一翼を担うことができた。

後半は、「わくわくチャレンジ教室」に参加し、「クリスマスの思い出を作ろう！」をテーマに、クリスマスに関するクイズ大会やクリスマスグッズの製作を行った。デザイン力、想像力が養われ、さらに児童同士、児童と大学生の交流が図られ、有意義な体験を提供できた。

### 4. 文献

湯浅町教育委員会『紀州湯浅の町並み』、2001年 他

※本活動は湯浅町教育委員会、大工の早稲田伊織氏の協力を得て実施したもので、ここに謝意を表す。

## 大学生による地域連携活動の効果と課題

指導教員：小田真弓

ゼミ生：17名

### 1. はじめに

今年度は、前年度の地域連携活動で得られた課題を手掛かりに、大学生による地域連携活動の可能性を検討・実施し、その有効性と課題を検証することを目標に公益財団法人ボーイスカウト日本連盟泉州地区ビーバースカウト隊や和歌山親子のつどい実行委員会との交流とを深め、ゼミ活動を展開することとした。

### 2. 研究方法

公益財団法人ボーイスカウト日本連盟泉州地区ビーバースカウト隊や和歌山親子のつどい実行委員会との交流の中から課題解決に向けて研究する。

### 3. 公益財団法人ビーバースカウト隊とは

日本ボーイスカウト大阪連盟の泉州地区に属する各団である。自然体験や社会奉仕を通じて、青少年の健全な成長を支援することが目的である。ボーイスカウトでは、発達段階に応じて活動が変化する。ビーバースカウト（小1～小2）は保護者と一緒に探検や作物栽培など遊びながら学ぶ活動が中心である。カブスカウト（小3～小5）になると、ハイキングや清掃・募金、花植えなどの地域貢献に加え、キャンプや料理を通して自立心を育む。ボーイスカウト（小6～中3）では、キャンプなど本格的な野外活動に取り組み、班で協力して課題解決する経験を積む。さらにローバースカウト（18～26歳）は指導的社会的立場として活動を支え、地域運営にも関わる。

### 4. ビーバースカウトでの活動内容

#### (1)①活動日時・場所・対象者

- ・日時：2025年（令和7年）10月26日（日）9時～13時
- ・場所：大阪府貝塚市二色浜公園
- ・対象：子ども50名、大人50名

#### ②テーマ

せんしゅう地区のビーバースカウトが二色の浜に集まり、地域連携フィールド学習を行った。今回のテーマは、スカウトたちが『スカウトの証』を手に入れるために冒険へ出発し、“最後の創造ミッション”に必要な素材を道中で集めるというものである。歩きながら周囲を観察し、創意工夫を凝らしながら素材を探す過程では、知恵や想像力が試された。また、仲間と声をかけ合い、力を合わせて課題を乗り越える姿が随所に見られ、協力の大切さを改めて学ぶ機会となった。自然豊かな二色の浜での活動は、体力づくりにもつながり、スカウトたちにとって充実した学習体験になった。

#### ③コンセプト

コンセプトは、ファンタジー。海の案内人が各ポイント（森の精霊、海の生き物たち、海の守り人）に案内する。それぞれのポイントでは、ジェスチャーゲームや玉入れ、綱渡り、宝探し、自然



図1 天狗丸になりきる学生

アートのイベントがある。

#### ④イベントまでの準備

大阪のボーイスカウトへボランティア参加する準備として、以下のものを作成した。

- ・さかなくんが被っているような魚の帽子 黒2個、ソクのドット柄2個、白のドット柄4個
- ・天狗のお面5個、葉っぱ5個、蝶の羽と触覚をそれぞれ4つつ

#### ⑤当日の活動内容

- ・玉入れ…円の中に籠を担いだブラッキー(魚)が動き回り、参加者は円の外側からブラッキーの口に向かって玉(えさ)を投げる。制限時間がくると、ブラッキーは動きを止める。
- ・天狗ゲーム…靴飛ばしをしながらケンケン飛びをしたり、目隠しをしながらクネクネ道を渡ったり、パイプ形状の上を綱渡りしたりする。
- ・宝探しゲーム…神経衰弱と「箱の中身はなんだろう？」を海をテーマにして行う。
- ・自然アート…蝶の妖精になりきり、3色に色を分けそれぞれで活動をする。  
ボードにそれぞれの色の松ぼっくりをキャンバスに貼り付ける。
- ・フィナーレ…開催地である貝塚市のつげサンバ(認知症予防体操)を参加スカウトの前で見本となるように踊る。

#### (2)活動を通して学んだこと

公益財団法人ボーイスカウト日本連盟泉州地区ビーバースカウト隊の集会に参加し、異年齢の子ども達と一緒に活動することに教育の意味や良さがあることを学んだ。ゲームを通して年上の子どもが年下の子どもを助ける姿や、子ども同士で協力し合う姿が自然に生まれ、異年齢交流が「思いやり」や「協力する力」を育てることを実感した。また、活動を進める中で指導者は、子ども達が理解しやすい言葉を選び、どのように説明するかを工夫する必要性も強く感じた。わかりやすい言葉づかいは、子ども達の主体的な参加につながることを学んだ。これらの経験から、異年齢交流は楽しさだけでなく、子ども達の成長を促す重要な機会であり、保育者自身の伝え方や関わり方を見直すきっかけにもなることを学んだ。

#### (3)反省点・改善点

今回の活動を通して、事前準備の重要性と、当日の柔軟な対応力の必要性を強く実感した。まず、事前準備の面では、パンフレットの読み込みやイベントが行われる立地を把握することが、安心して活動に臨むための基盤になると感じた。特に立地を事前に確認することは、移動時間や動線を見通した行動につながり、活動全体の流れをスムーズに行う上で欠かせないと感じた。また、自分の役割や子どもの姿を予測しておくことで心に余裕が生まれ、落ち着いて対応できることを学んだ。準備段階では、役割分担や製作の進め方において改善の余地があったと感じている。具体的には、材料や完成イメージを事前に共有しておけば、所要時間を踏まえて効率よく取り組むことができたと考える。また、つげサンバの練習に関しては個々で行っていたものの、本番では緊張や不安から十分に踊りきれない場面があった。このことから、子どもの前に立つという自覚をもち、指導者としての姿勢を意識する必要性を感じた。当日の実践では、片耳難聴の子どもが音を頼りに歩く場面で難しさが見られ、事前に配慮が必要な子どもの存在を想定する大切さを改めて実感した。また、活動のルール説明が簡潔でなかったことも課題である。子どもがルールを理解することは自発的な行動につながるため、要点を絞ったわかりやすい伝え方を工夫する必要があると感じた。活動中には発達段階による違いも見られ、靴飛ばしや玉入れが難しい子どもがいた。その際、ブラッキー(活動のキャラクター)が歩くスピードを調整したり、しゃがんだりするなど、柔軟に関わる様子が見られた。また、ボールを持って

いない子どもに自分のボールを渡す子どもの姿もあり、周囲をよく見て行動できている場面もみられた。一方で、一人の子どもに物を渡したことがきっかけで取り合いが起きるなど、複数の子どもが関わる場面での配慮の難しさも感じた。年齢の異なる弟妹が参加していたこともあり、対象年齢の幅広さへの対応にも課題があると感じた。さらにゲーム終了後に次の動きを示せず、子どもの気持ちに十分寄り添えなかったことや、担当以外の場面で積極的に声をかけられなかった点、役柄になりきれなかった点も反省点として挙げられる。これらは、活動全体の見通しをもつ力や、状況に応じて動く判断力がまだ不十分であることを示していると感じた。今回の経験から、事前準備は活動の質を左右する重要な要素であり、想定外の出来事にどのように対応するかも大切であることを学んだ。今後は、準備の段階から必要な情報の共有や役割の整理を徹底し、当日は全体を見渡す視野と柔軟な対応力を高めていきたい。



図2 イベント小道具完成



図3 開催地貝塚市のイメージキャラクター（ゆるキャラ）

## 5. 和歌山親子のつどい実行委員会とは

和歌山親子のつどい実行委員会は、病気や障害の有無にかかわらず、誰もが豊かに生きられる地域を目指し、2018年9月に設立された団体である。子育てにおける孤立感を解消し、前向きな子育てを支援することや病気・障害のある子どもとその家族が安心して暮らせる地域づくりを目的に活動している。普段の活動として小児がんや障害児支援に関する講演会やライトアップなどの啓発活動も行い、地域の理解を広げている。さらにレモネードスタンドなどで寄付を募り、治療支援に役立っている。これらの取り組みを通じて、誰もが生きやすい社会を目指している。

## 6. 親子クリスマスでの活動内容

### (1)① 活動日時・場所・対象者

- ・日時：2025年(令和7年)12月21日(日) 11時～15時
- ・場所：和歌山市北コミュニティセンター 2階 多目的ホール
- ・対象：幼児～小・中学生とその保護者（約250組）

### ② テーマとコンセプト

- ・テーマ：風の通り道
- ・コンセプト：日々の行き詰まり感から解放され、風の流れを感じ、生きる力が湧いてくるような場になる。

### ③活動内容

誘導では、来場者へ写真の場所を伝え、介助が必要な方にはエレベーターの案内を行った。来場者は挨拶を交わしながら写真へ向かっていた。荷物運びや設営の際も地域の子どもや保護者が写真の装飾やブースを見て笑顔を見せたり、写真を撮ったりする様子が見られた。サンタの衣装や音楽に反応し、列に並んで順番を待つ姿があり、写真撮影は終始にぎやかで和やかな雰囲気で行った。また、着ぐるみの「きいちゃん」として来場者と交流した。初めは戸惑う子どももいたが、手を振



図4 きいちゃん（信愛学生）

るなどの関わりを通じ、次第に子どもから近づいて手を握ったり同じポーズで撮影したりする姿が多く見られた。活動を通し、子ども達が「きいちゃん」に親しみをもって関わっている様子が確認できた。

### (2)活動を通して学んだこと

クリスマスのつどいを通して、子どもだけでなく地域の方との交流の大切さを学んだ。当日は各ブースに分かれて、子ども達の活動の補助や事務職の方のお手伝いを行った。その中で、子ども達が自由に想像したり、イメージをふくらませたりしながら活動を楽しんでいる様子が見られた。また、地域の方にバルーンアートを教えていただく機会があり、子ども達の好きなキャラクターや動物など、少し難しい作品にも挑戦することができた。完成したバルーンを見て喜ぶ子ども達の表情や、「前にも作ってくれたね。」と声をかけていた場面から、地域とのつながりを身近に感じる事ができた。この行事を通して、地域の方との関わりが子ども達の活動をより楽しく、豊かなものに行っていることを学んだ。

### (3)反省点・改善点

自由遊びの一環としてお絵描きをしている際に、子どもがペンを隠して遊び始めた。子どもが楽しそうにしていたため、「どこかな、どこかな〜。」と一緒に遊びを続けてしまったが、途中でその子どもの保護者が迎えに来た。保護者は、子どもを連れて別のスペースに行こうとしている様子だったが、子どもはペン遊びに夢中になっており、なかなか切り替えて帰ろうとしなかった。「ペンさん、キャップさんがいなくて寂しそうにしているよ」などと声をかけたが、十分に気持ちを切り替えることができず、対応に困る場面があった。この経験から、「保護者が来たら遊びは終わり」とはっきり伝えることが必要だと考えた。「楽しかったね。」「もっと遊びたいよね。」と共感の姿勢を示しつつ、「お迎えが来たから帰る準備をしようね。」と伝えるべきだと考えた。



図5 活動中の様子



図6 活動中の様子

## 7. まとめ

この二つの活動を通して、大学生による地域連携活動の有効性と課題を検証した。子ども達の成長には、子ども同士の関わりや地域の方との交流、人との温かい交流が大きな役割を果たしていることがわかった。また、活動を主催してくださっている方々の年齢が高齢であるということも分かった。そこで、私達が共に活動を展開していくことで、人材の若返りとなり、担い手不足に悩んでいる団体の方々の役に立てることも分かった。今回の活動を通して大学生による地域連携活動の有効性を実感した。これからも大学生による主体的な活動を企画・展開していく必要があると考える。

## 8. 参考文献

ボーイスカウト日本連盟 <https://www.scout.or.jp>

和歌山親子のつどい～風のとおり道～ <https://wot.gob.jp>

貝塚市ゆるキャラ <https://yuru-character.com/archives/32772448.html>

# 地域連携フィールドゼミナール（飯田ゼミ）成果報告

## 和歌山市民の健康・体力づくり

ゼミメンバー：18名

指導教員：飯田まなみ

### 1. はじめに

私たちは、和歌山市民の健康・体力づくりや和歌山市の運動を通じた地域活性化を目標として活動を進めてきた。まず、和歌山市民が抱える課題として、①若者の県外への人口流出、②小学生の運動時間の減少、③働き世代の運動習慣の希薄化の3つが挙げられる。それらの課題を解消するため、和歌山市スポーツ振興課から助言をいただき、小学生を対象とした運動フェス、働き世代・親子での健康フェスを計画し実施した。また、スポーツ庁が主催するスポーツ・まちづくりコンペティションを通して、県内の若者が気軽に集まる場の提案をした。以上3つの活動について述べる。

### 2. スポーツ庁主催「スポーツ・まちづくりコンペティション2025」への挑戦！

#### (1) 参加の動機

まち全体でスポーツを親しめる「場」づくりを提案するコンペティションであったため、まず和歌山市の現状の把握に努めた。その結果和歌山市は、平成30年より大学誘致が開始され、4つの大学が開学した。それにより4000人だった若者が7000人程度まで増加した。さらに県内進学率が全国ワースト1から脱却した。そんな和歌山市の現在の課題は、若者のための施設が少なく、県内よりも県外に出かけることが多い。このような状況では、和歌山市内の進学者が増えたにも関わらず、和歌山に残って「生活したい」や「働きたい」と思う若者は増加せず、卒業後県外へ流出する可能性がある。この課題を「若者」の視点から私たちにできる「人と人をつなげる場」を提案したいと考え、コンペティションに参加することを決意した。

#### (2) 考えた企画

私たちは若者同士が交流しながら気軽に運動できる場所が必要であると感じ、みかんの形をした「みかんだーム」という施設を考えた（図1）。テーマは「笑顔が溢れる街づくり～ここから広がる和ここに実る未来～」とした。このドームは4階建てで、各階で異なる活動ができるようにし、スポーツを通じて若者が交流できる場となることを目指している。スポーツ特化型の施設にした理由は、スポーツにはストレス発散やリフレッシュ効果といった心の健康促進の効果や、人をつなぐ力など多くの魅力があるためである。



図1 提出した提案「みかんだーム」

(3)この企画を考えて感じたこと、これからしたいこと

各階を検討する中で、4階をフットサルコートとして活用しつつ、防災の観点から避難所としても利用できる空間にするなど運動だけでなく緊急時にも役立つ施設とした。また、1階にカフェを設置することで、運動を行う若い世代だけでなく、高齢者にも活用してもらえる場所となるように工夫した。これにより、同世代の交流だけでなく、世代を超えたつながりを日常的に体験できる場となる。

この企画を考える中で、現在の和歌山に不足している課題に気づき、私たち大学生に何ができるかを考える貴重な機会となった。今後の大学生活を通して、積極的に地域に貢献していきたい。

### 3. 「子どもの運動フェス！～みんなの笑顔の呼吸！元気の型！パワー全開斬り！～」の開催

(1) 背景

この運動会を開催した理由として、小学校低学年の時期に、このイベントを通して運動の楽しさを知ってもらい、日頃から運動する習慣を身に付けてもらおうと考えた。さらに、小学校低学年は、運動を通して投げる、跳ぶ、走るなどの**運動基礎力を身に付ける**とともに、仲間と協力したり、最後までやり遂げようしたりする**心が育つ**大切な時期である。その大切な時期に相応しい内容を模索した。

(2) 「子どもの運動フェス」を行うまでの過程

目的検討→日程調整→チラシ製作(図2)→小学校や公民館へ配布→対象分析→種目の検討→準備物作成→会場準備→リハーサル→改善・準備物修正→当日

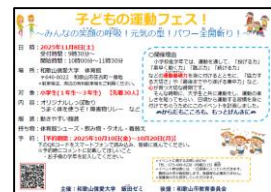


図2 運動フェスチラシ

(3) 「子どもの運動フェス」の内容

種目は、基礎体力や反射神経を養うことの他に、運動が苦手な子どもも安心して参加できるような種目を考えた。また、仲間と協力する力が身に付くよう、チーム対抗の競技も考えた。さらに、スポーツ振興課の方からのアドバイスにより、小学校で行っていない種目を取り入れることも検討した。ねらいと内容を表1にまとめる。

表1 「子どもの運動フェス」の内容	
プログラム1 「集合」	
ねらい	コミュニケーション能力や協調性を育む。
内容	お話を聞き、自分が当てはまる場所を選び、集まったメンバーと交流する。
プログラム2 「準備体操」	
ねらい	筋肉・関節をほぐし、怪我の予防をする。
内容	音楽に合わせて体を動かす。
プログラム3 「しっぽ取り(写真1)」	
ねらい	走る、追う、逃げる動作を通して、敏捷性や反応力を高める。
内容	チームに分かれてしっぽを取り合う。取ったしっぽが多いチームの勝ち。
プログラム4 「運ぶリレー(写真2)」	
ねらい	慎重な動作・バランス感覚・集中力を育てる。
内容	お玉、ラケット、塵取りのどれかを使ってピンポン玉を運ぶリレー。落とさないように障害物を越える。
プログラム5 「ドーナツドッジ(写真3)」	
ねらい	ボールを避ける、捕る、投げる動作を通して、敏捷性・投動作を高める。
内容	ドーナツ状のコートで外野は内野を当て、当たれば審判にタッチして復活。
プログラム6 「障害物リレー(写真4)」	
ねらい	跳ぶ、くぐる、またぐなど多様な動きを経験し、基礎的運動能力を高める。
内容	平均台、フラフープくぐり、指定された色を踏むなど。
プログラム7 「ストレッチ」	
ねらい	体をほぐして、けが予防。
内容	ペアでボールを使ったストレッチ。



写真1 しっぽ取り



写真2 運ぶリレー



写真3 ドーナツドッジ



写真4 障害物リレー

(4) アンケート結果【小学生：16人、保護者：17人】(表2)

表2 「子どもの運動フェス」のアンケート結果	
・小学生のアンケート結果	
【学年】1年生10名、2年生3名、3年生3名	
【平日に体を動かして遊ぶ時間】「10分程度」5人、「30分程度」2人、「60分程度」7人	
【休日に体を動かして遊ぶ時間】「10分程度」4人、「30分程度」5人、「60分程度」6人	
【楽しかった種目(複数回答可)】	
「しっぽ取り」11人、「運ぶリレー」1人、「ドーナツドッジ」6人、「障害物リレー」3人	
・保護者のアンケート結果	
【このイベントを知ったきっかけ】	
・チラシで知った方14名 ・紹介で知った方2名	
【保護者の感想】	
「子どもたちが楽しそうにしていた」や「体を動かすことができた」「学生子どもへの接し方がよかった」という声があった。	

4. 「働く人の健康フェス～久しぶりに運動したら全く動けなくて今これ～」の開催

(1) 背景

第二期和歌山市スポーツ推進計画に基づき、ライフステージに応じたスポーツの促進を目的とし、働き世代を対象に健康フェスを計画していた。しかし、働き世代には運動機能に差があるため、企画をするうえで、安全性を担保できなくなると考えた。そのため、20代から40代に世代を絞ることで対象の運動機能に合った計画をたてることができた。さらに参加率を高めるために親子での参加を勧めた。このイベントをきっかけに健康意識の向上はもちろんのこと、心も体もリフレッシュし日常的に親子で運動を楽しめるようになることを目的に「働く人の健康フェス」を計画した。

(2) 「働く人の健康フェス」を行うまでの過程

目的検討・対象決定→日程調整→種目の検討→チラシ制作(図3)  
→チラシを配布(幼稚園や保育所、コミュニティセンター等)  
→種目の再検討→準備物作成→会場準備→改善・準備物修正  
→リハーサル→当日



図3 チラシ

(3) 「働く人の健康フェス」の内容

種目は40代までの運動機能を考慮し、スポーツ振興課の方々にアドバイスをいただき、家庭に持ち帰ることができる運動やストレッチを活動内容に取り入れた。ねらいと内容を表3にまとめる。

表3 「健康フェス」の内容	
プログラム1 「ストレッチ・親子運動(写真5)」	
ねらい	筋肉や関節をほぐし怪我の予防をする。家でもできるようにする。
内容	柔軟体操やアニマルウォーク、ボール運動等
プログラム2 「障害物競走(写真6)」	
ねらい	バランス感覚・跳ぶ・蹴るなど多様な動きを経験し、蘇らせる。
内容	平均台や縄跳びなどを使った障害物競走
プログラム3 「玉入れ(写真7)」	
ねらい	投げることを通して肩をほぐし得点を競い合う楽しさを味わう。
内容	得点が書かれた段ボールにボールを投げて得点を競い合う
プログラム4 「親VS大学生リレー(写真8)」	
ねらい	学生と競うことで本気を引き出し、若いころを思い出して楽しんでもらう。
内容	運動場で親対大学生が全力で競い合う
プログラム5 「ストレッチ」	
ねらい	運動後の体をほぐすため。
内容	長座や腕伸ばしなどのストレッチ



写真5 ストレッチ



写真6 障害物競走



写真7 玉入れ

(4) アンケート結果【20代から40代の8人】(表4)

表4 「健康フェス」アンケート結果
【1日の運動時間】 「60分以上」1人、「およそ30分」3人、「全くしていない」4人
【毎日運動することへの意識】 「心掛けている」4人、「心掛けていない」4人
【楽しかった種目(複数回答可)】 「玉入れ」2人、「障害物競走」4人、「リレー」2人、「親子ストレッチ」2人
【感想】 ・学生さんたちに助けてもらい楽しくリフレッシュできた。 ・親がメインの活動が多かったので意外性があり面白かった。親だけのイベントでなかなか盛り上がり楽しんでる機会はないので自然と笑顔が出ました。 ・大人が本気で楽しんでいる姿を見せることで子どもたちはより楽しめていたのかなと思います。 ・普段使わない筋肉や運動で体がこたえましたがとてもリフレッシュになり楽しかったです。子どもと一緒に遊びながら運動できてよかったです。 ・駐車場があればもっと来やすい(参加しやすい)。



写真8 リレー

5.まとめ

まず、スポーツ庁が主催する「スポーツ・まちづくりコンペティション 2025」での企画を通して、現在の和歌山県での課題を見つけるきっかけになり、その課題を若者の視点からどのように解決するかを考えた。また、若者だけが楽しく運動できる施設だけでなく、地域の人・多世代が気軽に交流できる場や避難所等になることで、和歌山県の課題解決の一步につながるだろうと考える。

次に、世代を超えて抱えている運動不足という課題、加えて「運動の楽しさを思い出してもらいたい」という私たちゼミ生の思いから、「子どもの運動フェス」と「働く人の健康フェス」を一から企画した。子どもが無理なく楽しめる動きはどんなものか、普段あまり運動をしない大人でも気軽に参加したくなる工夫は何か、そして安全に楽しんでもらうためにはどんな配慮が必要なのか、一つひとつの課題に向き合いながら誰もが自然と体を動かしたくなるような内容を目指して試行錯誤した。また、参加者が楽しめるように学生がどんな場面でも応援することや勝敗にとらわれず精一杯身体を動かすことを第一に考えた。それによりイベント当日に、多くの参加者が楽しそうに動いている姿を見ることができ、達成感を得ることができた。さらに、終了後に11月末に行われる大学祭までのストレッチカレンダー(写真9)を配布した。このカレンダーはフェス当日に行ったストレッチを、欠かさず行うことができたなら、景品をお渡しするものである。大学祭当日、30組中14組の方々にお越しいただき、大学祭も同時に楽しんでいただいた。大学祭では、ゼミの活動をポスター掲示した(写真10)。

今後は、運動が特別なものではなく、日常の中で自然と取り入れられるようなものであることや運動の価値を全ての世代に伝えていきたい。

最後に私たちの取り組みに、ご指導、ご協力頂いた和歌山市スポーツ振興課の皆様へ感謝を申し上げます。



写真9 ストレッチカレンダー



写真10 ポスター掲示

## IV. おわりに

『2025年度きょう育の和センター報告書』に今年度も多くの地域連携の報告が寄せられました。本学学生は、地域の方々や子どもたちに対して多様な形で働きかけ、その働きかけに対して地域から応答される関係の中で活動を展開してきました。こうした環境との相互作用の過程において、学生は単に技能や知識を身につけるにとどまらず、自己の感じ方や考え方、他者理解といった内的世界を再構成し続けてきたといえます。そこには、大学の授業という枠組みの中では出会うことのできない人々や活動、和歌山県固有の自然・施設といった多様な環境が含まれています。

以上の報告を踏まえると、このような活動は、学生にとってのみならず地域社会にとっても経験の質を高める契機となっていると考えられます。

最後に、今年度も本学の地域連携活動にご協力・ご支援いただいた和歌山県各市町の行政の皆様、並びに地域社会の皆様に心より感謝申し上げます。

溝口希久生

2026年3月31日 発行

きょう育の和センター長  
委 員

森下順子  
溝口希久生（編集担当）  
宮定 章  
原 啓司  
前島美保（編集担当）  
飯田まなみ  
奥田雅代（編集担当）  
榎本真伍  
三枝佐智



和歌山信愛大学  
Wakayama Shin-ai University

和歌山信愛大学

きょう育の和センター発行

